



Title	アイヌ韻文の行頭韻
Author(s)	丹菊, 逸治
Citation	1-127
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/79010
Type	research report
File Information	Tangiku20200723.pdf



[Instructions for use](#)

アイヌ韻文の行頭韻

Alliteration in Ainu Poetry

丹菊逸治

Tangiku Itsuji

アイヌ・先住民研究センター

Ainu Teetawanoankur Kanpinuye Cise
Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

2019年度アイヌ・先住民族言語アーカイブプロジェクト報告書

Ainu and Indigenous Language Archive Project Report 2019

はじめに

2018 年に北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書として刊行した『アイヌ叙景詩鑑賞～押韻法を中心に』では、upopo ウポポなどアイヌ叙景詩の押韻法について解説した。同書では紙数の関係もあり、叙景詩以外のジャンル、特に叙事詩の韻文形式についてはかなり簡略化したモデルで説明せざるをえなかった。本報告書では、叙景詩と叙事詩の韻文形式について改めて検証している。

本来であれば本報告書のほうが先に出るべきだったのだが諸般の事情で遅れてしまった。アイヌ語を学び叙事詩を鑑賞する人々にいくらかでも参考にしていただければ幸いである。

2020 年 3 月 4 日

丹菊 逸治

目次

アイヌ韻文の行頭韻

はじめに-----	3
目次-----	5
序章-----	9
1. 本書の目的-----	9
2. アイヌ語韻文の「押韻」にかんする先行研究-----	9
第1章 伝統歌謡ウポポの行頭母音韻-----	11
概略-----	11
1. 目的-----	11
2. アイヌ伝統歌謡ウポポ-----	12
2-1. 本稿で扱う資料-----	12
2-2. ウポポの歌い方-----	12
2-3. 完全4行形式のウポポ(8歌)-----	13
3. 一般的なウポポの頭脚韻-----	18
3-1. 母音による行頭韻-----	19
3-1-1. 母音による行頭韻と「繰り返し語句」-----	19
3-1-2. 母音による不完全韻-----	20
3-2. 子音による行頭韻-----	21
3-3. 母音による脚韻-----	25
3-4. 子音による脚韻-----	26
3-4-1. 子音による脚韻とは何か-----	26
3-4-2. 子音による脚韻と思われる例-----	27
3-5. 母音による繰り返し韻-----	29
3-6. 子音による繰り返し韻-----	30
4. 繰り返し語句-----	32
4-1. 繰り返し語句が行頭にあるウポポ-----	32
4-2. 繰り返し語句が行末にあるウポポ-----	33
4-3. 最終行内の繰り返し語句-----	34
4-4. 同一行の繰り返し-----	36
4-4-1. 4行中2行が繰り返される形式-----	36
4-4-2. 同一の1行のみを繰り返す形式-----	37
4-4-3. 同一の2行を2回繰り返す形式-----	38
4-5. 関係文的な繰り返し語句-----	39
5. 交差配列による行頭韻-----	40
6. 1行の音節数-----	41

7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ 6 歌の検討-----	42
7-1. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 1 / 6 -----	43
7-2. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 2 / 6 -----	44
7-3. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 3 / 6 -----	46
7-4. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 4 / 6 -----	48
7-5. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 5 / 6 -----	49
7-6. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその 6 / 6 -----	51
7-7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ 6 例のまとめ-----	52
9. 第 1 章の結論-----	53

第 2 章 アイヌ叙事詩の行頭母音韻-----	54
概略-----	54
1. 目的-----	54
2. 平賀サタモによる 1959 年の語りにおける「行」-----	55
2-1. アイヌ韻文体の「行」-----	55
2-2. 1 行の音節数-----	55
2-3. 1 行の最大音節数-----	57
2-4. 1 行の単語数-----	58
3. アイヌ叙事詩の詩連構造-----	59
3-1. 2 行からなる対句や定型表現-----	59
3-2. 詩連-----	60
3-3. 独立性の高い関係修飾節・4 行対句-----	62
3-3-1. 独立性の高い関係修飾節による詩連-----	63
3-3-2. 4 行からなる対句による詩連-----	63
3-4. 詩連構造があいまいな例-----	64
3-5. 1 詩連の行数-----	66
4. 平賀サタモの 1959 年の語りにおける押韻出現数-----	67
4-1. 4 行詩連における頭脚韻-----	68
4-1-1. 4 行詩連 (104 例) における行頭母音韻出現数-----	70
4-1-2. 繰り返し語を除外した場合の行頭母音韻出現数-----	70
4-1-3. 4 行詩連における行頭子音韻出現数-----	72
4-1-4. 行頭母音韻・繰り返し語句を持たない 4 行詩連-----	74
4-2. 3 行詩連 (87 例) における行頭母音韻出現数-----	76
4-3. 5 行詩連 (48 例) における頭脚韻-----	78
4-3-1. 5 行詩連における行頭母音韻出現数-----	78
4-3-2. 5 行詩連における行頭子音韻出現数-----	79
4-4. 2 行詩連における行頭母音韻・行頭子音韻出現数-----	80
4-5. 6 行詩連の構造-----	81

4－5－1. 6行詩連の行頭母音韻出現数-----	81
4－5－2. 繰り返し行による「5行詩連+1」構成-----	82
4－5－3. 省略宣言句による「5行詩連+1」構成-----	83
4－5－4. 場面転換句による「5行詩連+1」構成-----	83
4－5－5. 感嘆句による「5行詩連+1」構成-----	84
4－5－6. 間接話法句による「5行詩連+1」構成-----	85
4－5－7. 対句を含む構成-----	86
4－5－8. 言い換えを含む構成-----	87
4－5－9. ただ長いだけの構成-----	88
4－6. 7行詩連の構造-----	89
4－6－1. 7行詩連その1：比喩による繰り返しを含む構成-----	90
4－6－2. 7行詩連その2：美辞の繰り返しを含む構成-----	90
4－6－3. 7行詩連その3：長い定型的表現を含む構成-----	91
4－6－4. 7行詩連その4：言い換えを含む構成-----	91
4－6－5. 7行詩連その5：関係文と定型表現を含む構成-----	92
4－6－6. 7行詩連その6：長い関係節を含む構成-----	92
4－7. 平賀サタモによる1959年の語りにおける詩連と押韻まとめ-----	94
5. その他の押韻-----	95
5－1. 複数の詩連において最初の行あるいは最終行を一致させる-----	95
5－2. 部分的な一致による連鎖-----	96
5－2－1. 同一の語句による連鎖-----	96
5－2－2. 同一音・類似音による連鎖-----	97
6. 不完全韻-----	98
6－1. 複数音節で母音や子音が一致する-----	99
6－2. 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している例-----	100
6－3. 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例-----	101
6－4. 音節数が異なる例-----	102
6－5. 行内位置が異なる例-----	103
6－6. 行内位置と音節数がともに異なる例-----	105
6－7. 行内位置は同じだがあまり類似していない例-----	106
6－8. あまり類似しないが3行以上にまたがる例-----	107
7. 第2章の結論-----	109
第3章 結論-----	110
引用文献-----	111
付録資料：平賀サタモによる1959年の語りの全詩連構成および全不完全韻-----	113

序章

1. 本書の目的

本書はアイヌ語文における「音の一致」の一部が意識的な技法すなわち「押韻」であることを指摘するものである。丹菊逸治（2018）では4行詩連構造と頭脚韻、不完全韻、韻律（音節構造の一致）の存在を主張したが、それらがたんに偶然によるものではないと考える明確な根拠を示さなかった。本稿では行頭母音韻、4行詩連構造、不完全韻について、NHK（1965）および、平賀サタモ（[1959]1993）という限られた資料においてではあるが、偶然生じたものか否か検証を試みるものである。

行頭母音韻については、①NHK（1965）収録の upopo ウポポ 159 歌には行頭母音韻がほぼ例外なくみられること、②平賀サタモ（[1959]1993）には行頭母音韻が偶然に生じるより高い比率でみられることを指摘する。

4行詩連構造と不完全韻については、丹菊（2018）を補う解説とともに、巻末に田村すゞ子・平賀サタモ（[1959]1993）一篇全体の全詩連構造と不完全韻と思われる全ての例を示す。

2. アイヌ語語文の「押韻」にかんする先行研究

アイヌ語の日常会話文体と朗唱文体の間に語彙や動詞複合体形成法の違いがみられるることは早い時期から知られていた。金田一京助（[1931]1993：278）では最上徳内による文化5年（1858年）の『渡島筆記』の記述をあげている。同書では最上徳内は朗唱文体について「古辞雅語を専に用ふることと見えた」と記し、現在でも用いられている「雅語」という表現で言及している（高倉新一郎編 1969：531-532）。現在のアイヌ語研究やアイヌ文学研究においては朗唱文体は「雅語」「韻文」などとさまざまに呼ばれるが、本稿では「韻文」と呼んでおく。この朗唱文体=韻文について、日本の研究者の多くは「音節数をそろえる」ものだと考えてきた¹。特殊な人称形式や語彙を用いたり、対句表現を多用したり、ということはあっても「韻」すなわち頭脚韻などの押韻は存在しないと考えてきたのである。

金田一京助（[1908]1992：18）が「韻や、アクセントに基く規定は全然自由で、唯音綴の数のきまりが、ほぼ一定して居る事である。」として以来、今まで多くの研究者の見解はそれとほぼ同じである。中川裕（1997：195-196）は「アイヌ語の韻文は『韻』より『律』のほうに重点がおかれていて、中川裕・中本ムツ子（2007：107）は「韻文といつても、いわゆる頭韻、脚韻のようなものは、踏んでいるようにみえることもありますが、さ

¹もちろん1行の音節数が意識的にそろえられているのは間違いない、実際に5音節行の比率は非常に高い。平賀サタモ（[1959]1993）においても、虚辞を含めれば全1151行中1018行、つまり全体の88.4%、虚辞を含めなければ763行（66.3%）が5音節行である。

して重要ではありません」とし、押韻への志向を否定している。

一方、押韻がみられるという指摘も全くなかったわけではない。Philippi ([1979]1982 : 29) では"In Ainu poetry rhyming occurs quite accidentally, as it does in Japanese poetry, but it is not prosodically relevant and not cultivated per se. Alliteration occurs sporadically, and there sometimes appear to be conscious attempts on the part of the reciters to cultivate it, although it is by no means obligatory." 「アイヌ詩においては脚韻（rhyming）は日本の詩におけると同様に偶発的なものであり、韻律論的に関連はなく、本質的に洗練されたものではない。頭韻（alliteration）は散発的にあり、決して義務的ではないものの、歌い手がそれを洗練しようと意識的に試みているように見えることもある。」と指摘し、子音による行頭韻を例示している²。村崎恭子(1989:6)は樺太に伝承される散文形式の昔話ジャンル tuytah トウイタハについて「語りの間に、節のついた、韻をふんだ歌がはさまることがおおい」と指摘し、村崎恭子(2001:9)では「散文の語りの中に、子どもの泣き声や鳥の鳴き声、舟が近づいくる音、糸つむぎの音などを描写するのに、韻を踏んだ調子の良い短い歌が挿入されている」とする。ただし「韻」や「調子」の具体的な詳細についてはふれていない。また、報告・論文等での言及はないものの、詩の実作者や一部の研究者の間では北海道のアイヌ韻文における押韻も意識されていた³。

本稿はほぼ Philippi ([1979]1982) と村崎恭子(1989) の指摘を裏付けるものである。Philippi の「義務的ではないが、意識的に用いられている」という指摘は叙事詩に当てはまり、村崎恭子の「韻をふんだ歌」という指摘は叙景詩に当てはまる。

² Philippi (1979 : 29) で Alliteration の例として挙げられているのは行頭子音韻である。

なお、Philippi は husko as ras/ras emaknakur-/ -roski kane/asir as ras/ras esanakur-/ -roski kane の 6 行で C₁VC₂ の C₁ にあたる r の一致だけでなく、C₂ にあたる s の一致も Alliteration (頭韻) と呼んでいる。

³ 太田満氏によれば、言語学者浅井亨（アイヌ語）は詩法としての押韻に気づいていたという。太田満氏自身も詩作において押韻は意識している、とのことである（2018年5月2日ネット上の個人的なテキストメッセージのやりとりによる）。

第1章 アイヌ叙景詩の行頭母音韻

概略

アイヌ叙景詩の1ジャンル upopo ウポポの行頭母音韻の有無を『アイヌ伝統音楽』(1965 NHK)に掲載された159歌で検討した。その結果、行頭における母音の一致は偶然より高い比率(153歌 96.2%)で生じていて、作為的な押韻が行われている可能性が高いことがわかった。行頭における母音の一致がみられないものは6歌あるが、そのうち3歌には行頭母音がかかわる押韻が確認できる。いかなる意味でも行頭に押韻を持たないのは3歌であり、それらを除くと偶然とは思えない高率(156歌 98.1%)で押韻が出現していることが分かった。村崎恭子による1989年の「樺太アイヌの散文説話の挿入歌には押韻がある」という指摘が北海道アイヌのウポポにも当てはまることになる。

1. 目的

第1章では、アイヌ伝統歌謡 upopo ウポポの押韻・繰り返し語句の在り方と行頭押韻の出現比率を確認し、「押韻」がたんに偶然によるだけのものか、意図的に行われているか否かを推定することである。資料として、NHKのアイヌ伝統歌謡調査資料の報告書にあたるNHK(1965)を用いる。

本稿では、まずウポポの4行詩形式を確認し、次に行頭で押韻も繰り返し語句も持たない(つまり、母音の一致を持たない)歌が6例しかないこと、さらにそのうち3例が「何らかの形で押韻している」ことを示す。

2. アイヌ伝統歌謡ウポボ

2-1. 本稿で扱う資料

アイヌ伝統歌謡は4行形式を基本とする。丹菊逸治（2018）ではそれを詩形式としてとらえ、風景や情景の描写を内容とするものが多いことから「叙景詩」と呼んだ。ウポボと呼ばれる、複数人で歌う歌謡ジャンルの諸歌も、もともとは個人の詩として作られたものだと思われる⁴。複数人で歌うこともあり、ウポボの詩形式はかなり整えられている。ほとんどが4行で1つの歌になっている。

NHK（1965）は事実上、これまでに刊行された最大のアイヌ伝統歌謡資料である⁵。438歌が楽譜付きで紹介されている。残念ながら付された6枚のレコードには64歌しか音源が収録されていない。実際に調査で採録された録音は全てNHKに保存されており、一時は研究利用もされていた。アイヌ民族にとっては伝統文化復興のためにも貴重な資料であり、早期の公開が望まれる⁶。刊行されたNHK（1965）に付された音源は少ないものの、同書には楽譜が掲載されており歌い方がある程度確認できる⁷。本稿では内容ではなく押韻という音からみた形式を扱うため、資料をこのNHK（1965）掲載のウポボ159歌に限定した。

2-2. ウポボの歌い方

ウポボの歌い方には1人が先導で歌い、その後に数人が①何グループかに分かれてそれぞれ輪唱で続く場合、②数人が声を合わせて唱和する場合、がある（主として地域によって異なる）。その際にしばしばシントコと呼ばれる漆器の蓋を叩いて拍子をとる。これを慣習的に「打（だ）」と呼ぶことがあり、本稿でもそれにならっている。1打は多くの場合2音節に相当する。4打単位で音の高低パターン（いわゆる旋律）が付けられることが多い。これがウポボにおける、いわゆる「行」である（「句」と呼ぶこともある）。

⁴ アイヌ伝統歌謡はアムール・サハリンからさらにシベリア・北極圏まで広がる「個人の歌」文化に属する。詩としての内容分析については、代表的な叙景詩を取り上げた丹菊逸治（2018）等を参照されたい。

⁵ 録音資料としては久保寺逸彦の録音資料等も存在するが、刊行物になっていない。

⁶ 何人かの研究者は複製を所持しており、これまでにその一部が研究利用され論文も公開されている。また北海道アイヌ協会本部にも録音の複製があるというが、やはり公開はされていない。現在遺族の手元にどれだけが還元されているかも不明である。

⁷ 楽譜は増田又喜と谷本一之によるもので、楽譜の作成方針は統一されていない。また、アイヌ伝統音楽の構造や伝統的な歌唱法を完全に反映したものではない。したがって音源が公開されなければ実際の歌唱の細部は不明である。

2-3. 完全4行詩形式のウポポ（8例）

ウポポには「繰り返し」行や、意味のないかけ声が大半を占めるものも多い。だが、各行が異なる語句で構成された、完全な4行詩形式のものもある。つまり、同じ行を2~4回繰り返したり、意味のないかけ声が大半を占めたり、ということではなく、言語音として意味があり、互いに異なる4行で構成されているものである。NHK(1965)に掲載された159歌のウポポにはそうした完全な4行詩形式のものが8例ある。楽譜番号は第16、59、60、124、126、127、135、140番である。これらには全て押韻が見られる。

以下、ウポポ資料は提示順に番号をふるが、NHK(1965)の楽譜に付された番号（「楽譜番号～」）も示す。アイヌ語表記は適宜修正してある。母音韻・子音韻は適宜太字で示してある。不完全韻は下線部で示してある。持続時間が同じ部分を/で区切って示すことがある。その場合、○で休止を示すことがある。「打」は確認できないため記していない。

日本語訳は基本的に丹菊による試訳である。語義不明の語は、カタカナでそのまま表記していることもある。語義が不明確な場合は訳語の後ろに「(?)」を付した。NHK(1965)に日本語訳が付されている場合はそれも掲載した。また、資料は□で囲んだが、必要に応じて□をさらに追加して語釈を加えてある。

資料1

楽譜番号16 (NHK1965:35) (採録地:白老近文)

(丹菊試訳)

A sipet parun	アシペッ川の河口の
K amuy mawe	神の風
K antori w a	天から
Pitor w a	神(?)から

(NHK1965:35掲載訳)

芦別川口の
神風は
天上から
神から

資料 2

楽譜番号 59 (NHK1965 : 71) (採録地：釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

- Hawo punkar hawop pa** 音がする (?) ブドウヅルで音がする (?)
Hasi kuruka sorarpa 枝の上に滝がある (?)
Hasipet un casi ハシペッ川の砦の
Kanras kasi ketunke 屋根ぶきの骨組みが見えた (?)

(NHK1965 : 72 掲載訳、改行は原文ママ)

……蔓で
…………
灌木の上を
片付けて
ハシペッの砦の
一本の割木を上に
かぶせ

資料 3

楽譜番号 60 (NHK1965 : 71) (採録地：釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

- Hesi punkar sorarpa** ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)
Wasipetun casi ワシペッ川の砦の
Kanrasi kasi ketunke 屋根板の上がはがれた (?)
Hawo punkar hawoppa 音がした 蔓で (?) 音がした

※kanrasi は kanras かもしれない

資料4

樂譜番号 124 (NHK1965 : 113) (採録地：静内地区豊畑)

(丹菊試訳)

Kanto horikasi	天空から
Kamuy ran mat hene	神が降ろした女神
<u>Payosi payo</u>	(?)
Kanto hora ko	天の香りが立つ (?)

(NHK1965 : 113) に付された訳

天空から
神の降した女神の
なりとどろく
天上の稻光りぞ

資料5

樂譜番号 126 (NHK1965 : 115) (採録地：近文)

(丹菊試訳)

Karapto atuy riri	樺太の海
Paya riri soya	行くぞ (?) 海原を (?)
Hutan kurka hutan rari	(?) の上を越えて (?)
Kane pon pon kane pon sor ka	金属の小さな小さな、金属の小さな (?)
Sa yusa soy a	(?)

※最終行は後世の追加行かもしだい

資料 6

樂譜番号 127 (NHK1965 : 116) (採録地：十勝地区芽室太)

(丹菊試訳)

Kaype rur sama	波のところの
Oniwen kamuy	荒々しい神が
Atuy pen rur	海のあたりで
Haw osi haw osi	声をあげる 声をあげる (?)

(NHK1965 : 116 掲載訳)

波にのって
おこった神の
おこった声が
叩き 叩く

資料 7

樂譜番号 135 (NHK1965 : 126) (採録地：千歳)

(丹菊試訳)

Ororo wa he kore p <u>un</u>	(?) して持たせるよ、ブン
Korokoni pon kama s <u>u</u>	フキが小さなますを (?)
O p tarakin na	槍が揺れるぞ
Haw o	ハウオ (大きな音を表す擬音語)

(NHK1965 : 126 掲載訳)

.....
蕗の小さな叭
ぶらぶらだ
.....

資料 8

楽譜番号 140 (NHK1965 : 128) (採録地：静内地区田原)

(丹菊試訳)

Nipesi <u>ka</u> ta	シナノキの内皮の上に
Nipesi <u>konkani</u>	シナノキの金属が (?)
Cara cara carin <u>na</u>	さらさらと音を立てる
Nisikur <u>ka ta carin</u> na	雲の上でさらさら音を立てる

以上の 8 例には「複数行の行頭あるいは行末において、母音あるいは子音の一致」がみられる。これらが「頭韻」と「脚韻」である。また下線を引いた部分のように、複数行で「似ている音連続」がみられることがある。これらが「不完全韻」である。以下では両者を「押韻」と呼ぶ⁸。これらの一致を技法的な押韻とみなしてよいかどうか、つまりこれらが「偶然の産物」以上のものであるかどうか、を検証することが本稿の目的である。

とはいっても、実際のウポポでは、このように 4 行の各行が異なり、また 4 行全体で意味が通じるような完全な詩形式になった作品は少ない。例えば、

- ・かけ声が主体のもの
- ・かけ声ではないにせよ、非常に短い語句が繰り返されるだけのもの
- ・意味の分からぬ行が 2 から 3 行含まれるもの
- ・1 行が半分の長さのもの

などがかなりある。だが、いずれにせよほとんどの作品に行頭・行末での音の一致、不完全韻がみられる。意図的であるにせよ偶然であるにせよ、「押韻」は「一定の時間間隔で同じ音が繰り返される」という現象であり、繰り返しの印象を与えるものである。

⁸ 音の一致がそれぞれ全て意図的であるかどうかに形式上の差異はない。ここでアイヌ韻文における「押韻」と呼んでいるものは、偶然の結果も作為の結果も含んでいるはずである。本稿の目的は、作者が全体として一致させるべく意識的・無意識的に努力しているかどうか、つまりなるべく多く押韻しようとしているかどうか、を解明することである。

3. 一般的なウポポの頭脚韻

NHK (1965) に収録されたウポポの多くは繰り返し語句・繰り返し行と、押韻つまり「行頭・行末における音の一致」を含んでいる。以下ではそれら「一般的なウポポ」について、

1. 母音による行頭韻
2. 子音による行頭韻
3. 母音による行末韻（脚韻）
4. 子音による行末韻（脚韻）
5. 母音による繰り返し韻
6. 子音による繰り返し韻

の例を確認する。

母音による頭韻はもっとも一般的にみられるものである。子音による頭韻は例は少ないものの、やはり意識的と思える例がある。母音による脚韻も意識的と思われるものの、かけ声等でそろえられていることが多く、韻と呼びにくい例もしばしばみられる。子音による脚韻については、当然ながら单一の子音では明確ではない。またアイヌ語の韻脚（複数音節による行末押韻の単位）が存在するのか否かも分かっていないため、はっきりしたことはいえない。

1行の内部において、複数の単語の語頭や語尾で同じ音を繰り返す「繰り返し韻」もしばしばみられる。母音、子音どちらの例もある。

3-1. 母音による行頭韻

資料 9

楽譜番号 7 (NHK1965 : 29) (採録地 : 千歳)

(丹菊試訳)

- | | |
|---|---------------------|
| Ororo pinne owa heya | オロロ (語義不明) 雄が集って ヘヤ |
| Owa cisinere | 集って鳴く (?) |
| Apka topa owa heya | 雄鹿の群れが集って ヘヤ |
| Owa cisinere | 集って鳴く (?) |

(NHK1965 : 29 掲載訳)

狼の雄の群がどっさり
どっさりさわいでいるよ
強い雄鹿がどっさり
どっさりさわいでいるよ

この歌の pinne 「雄の」 apka 「雄シカ」 topa 「群れ」は日常語でも用いられる。NHK (1965 : 29) 掲載訳では ororo は「狼」と訳されているが、おそらく歌い手の説明にもとづくのであろう。語り手は horokew 「オオカミ」から推測したのかもしれない。NHK (1965 : 29) 掲載訳では owa は「群がどっさり」と訳されている。o 「たくさんいる」と接続詞 wa と解釈したものであろう。heya は意味がないかけ声。cisinere は「さわいでいる」と訳されているが、この語形では他に記録されていない。cis 「鳴く」と使役語尾-re 等の組み合わせから、そういう意味になると歌い手が推測しただけかもしれない。

3-1-1. 母音による行頭韻と「繰り返し語句」

owa heya (第 1 行後半・第 3 行後半) が繰り返し語となっており、owa cisinere (第 2 行全体・第 4 行全体) が繰り返し行となっている。また、繰り返し行を含め 3 行の行頭で母音 o が繰り返されている (以下の太字部分)。

1. **Ororo pinne owa heya**
2. **Owa cisinere**
3. **Apka topa owa heya**
4. **Owa cisinere**

第1行冒頭の語 ororo と第2行冒頭の語 owa は違う語句だがともに同じ母音 o で始まっている。これが行頭の母音韻である。偶然同じ母音で始まっている可能性もあるが、故意に並べてある可能性もある。

第2行と第4行では同じ語句 owa cisinere が2回繰り返されているだけだから、「押韻」ではなく「繰り返し語」である。行頭母音 o が一致しているのも「押韻」ではない。だが、故意に同じ語句を繰り返しているので、これは「繰り返し」という技法である。また、押韻ではないにしても、同じ音になっているので押韻と同じ「繰り返しの感覚」の効果はある。

3-1-2. 母音による不完全韻

資料9の第1行 ororo pinne と第3行 owa cisinere は全体としての音、特に母音の並びが似ている「不完全韻」である⁹。

ororo pinne の母音の配列は o-o-o i-e

owa cisinere の母音の配列は o-a-i-i-e-e

oro	ro	pin	ne
o	wa	cisi	nere
母音 o	×	母音 i	母音 e

これらはしばしばみられる技法である。

⁹ 丹菊逸治（2018：22）および、第2章第6節を参照のこと。

3 – 2. 子音による行頭韻

子音による明確な頭韻の例は少ない。NHK (1965) に掲載された 159 歌では、暫定的ながら¹⁰全 595 行の行頭子音出現数は以下のようになっている。試みに声門閉鎖音を含む子音韻の割合も示したが、これもあくまで暫定的なものである。

表.1 NHK (1965) 掲載のウポボ 159 歌における行頭子音の割合

子音種別	出現数	比率	出現数のうち押韻もしくは繰り返し語句頭にある数と比率	出現数のうち押韻をなしている数と比率
h	263	44.2 %	232 (88.2%)	83 (31.6%)
声門閉鎖音	153	25.7 %	153 (100.0%)	83 (54.2%)
k	55	9.2 %	23 (41.8%)	23 (41.8%)
t	31	5.2 %	18 (58.1%)	9 (29.0%)
c	20	3.4 %	8 (40.0%)	6 (30.0%)
p	16	2.7 %	4 (25.0%)	0 (0.0%)
s	16	2.7 %	8 (50.0%)	6 (37.5%)
m	10	1.7 %	7 (70.0%)	2 (20.0%)
n	10	1.7 %	7 (70.0%)	3 (30.0%)
r	10	1.7 %	2 (20.0%)	0 (0.0%)
y	6	1.0 %	3 (50.0%)	0 (0.0%)
w	6	1.0 %	2 (33.3%)	0 (0.0%)
合計	595	100.2 %		

(以下、本稿各表では各出現率や比率を個別に小数点以下 2 位を四捨五入した。そのため合計が 100% ぴったりにならないこともある)

h が半数近く (44.2%) を占める。これは h で始まるかけ声がしばしば行頭に置かれていることを反映しているであろう。声門閉鎖音はいわゆる「母音始まり」のことであり、全体の 25.7% である¹¹。h と声門閉鎖音だけで 7 割を占める。残りの子音も繰り返し語句の行頭や押韻形式の音の一一致に参加していることが多い。本稿では子音韻については深入りせず、後の課題としたい。以下では行頭子音韻とみられる例をあげておく。

¹⁰ NHK (1965) では詩形が明確ではないこともあり確実なことがいえない。早期の音源の全面公開が望まれる。

¹¹ 丹菊逸治 (2018) では「声門閉鎖音による行頭子音韻」を推定したが、これを母音韻とみるか子音韻とみるかを含め議論の余地はあろう。別稿に譲りたい。

資料 10

楽譜番号 157 (NHK1965 : 142) (採録地：屈斜路)

(丹菊試訳)

Tuptari yan na	流水が寄せたよ
Tahiyo ta	タ ヒヨ タ (語義不明)
Hiyo roro ha ho	ヒヨロロロハホ (語義不明)
Hiyo ta	ヒヨ タ (語義不明)

(NHK1965 : 142 掲載訳)

流水が寄せたよ

.....

.....

.....

NHK(1965) の解説によれば tuptari は「流氷」のことらしい。rup 「氷」と関係がある語だろうか。yan は「上陸する（岸に向かってくる）」、na は終助詞である。tahiyo は不明、ta は場所を表す副助詞もしくは強調詞である。hiyo roro ha ho はいずれも言語音としての意味がないかけ声である。

意味が取れない部分が大半を占めるが、tuptari と tahiyo は語頭で母音が異なり子音とともに t である。つまり子音 t で押韻している。

このような行頭の子音による押韻は数が少ないが他にもみられる。

資料 11

楽譜番号 71 (NHK1965 : 77)

(丹菊試訳)

Hawwappa 半ワッパを

Hero hero hero 食べよう食べよう食べよう

※NHK (1965 : 77 9 掲載訳は「弁当食べよう」だけである。

hero は本来は a=e ro (e 「食べる」 ro 「～しよう」) であり、人称接辞 a=があるはずで、また子音 h は不要である。もし NHK(1965 : 77-78) の解説と訳の通りだとすると、本来は以下のように行頭母音韻を踏んでいたと考えられる。

Haw wappa

A=e ro

しかし、やがて第 2 行の冒頭の人称接辞 a=が、第 1 行末の wappa の末尾母音 a を伸ばしたものだと誤解されて意味が分からなくなり、e がたんにかけ声と解釈されるようになったのであろう。そして行頭子音韻を踏むように子音 h が付加されて以下になったのであろう。

Haw wappa

Hero

なお、楽譜によれば持続時間で区切ると a で行頭母音韻、h で行頭子音韻を踏む。

Hawwa / pa-

-**a** he / ro

he / ro-

-o he / ro

つまり 2 行詩ではなく、以下のように各行の音節数の少ない 4 行詩と解釈できよう。

Hawwapa

Hero

Hero

Hero

次のものは一見 2 行詩にみえるが、行の長さが半分の 4 行詩と解釈すると子音による頭韻の存在が分かる。

資料 12

楽譜番号 101 (NHK1965 : 95) (採録地：二風谷)

(丹菊試訳)

Hup ca ho horerere	トドマツの枝 ホ ホレレレ (語義不明、かけ声)
Hup ca ho hum hum	トドマツの枝 フムフム (かけ声)

この歌の持続時間の配分は以下のようになっている（/で区切った部分が同じ長さで歌われる）。

Hup ca ho / horerere
Hup ca ho / hum hum

これは 1 行の音節数が少ない 4 行詩形式である。4 行で示せば以下のようになる。

Hup ca ho	トドマツの枝、ホ（かけ声）
Horerere	ホレレレ（語義不明。かけ声）
Hup ca ho	トドマツの枝、ホ（かけ声）
Hum hum	フムフム（擬音語）

なお、NHK (1965 : 95-96) では horerere について胆振・釧路の類例から、元は ho ren ren だったと推測している。ho ren ren は「端よ沈め、沈め」というような意味である。hum hum は低い音を表す擬音語である。4 行には 2 行の繰り返し語句 hup ca ho が含まれているが、全て子音 h で始まっている。これは偶然ではなく、子音による頭韻であろう。

3-3. 母音による脚韻

資料 13

楽譜番号 8 (NHK1965:30) (採録地:沙流川流域ピタラバ)

(丹菊試訳)

Apka topa hoo 雄シカの群 ホー
Ho topa hoo ホー 群 ホー
Usus kin a hoo 蹄 草 ホー¹
Ho kin a hoo 草 ホー

(NHK1965:30 掲載訳)

雄鹿の群だ ホー
ホー 群だ ホー
蹄の跡が草を ホー
ホー 草を ホー

usus は日常語としては中川裕 (1995:62) に usis 「ひづめ」という語が記録されている。伝統歌謡中で語形が変化してしまったのか、たんに歌謡の記録時のゆれなのかは不明である。なお、usus 「ひづめ」と kina 「草」は名詞が並置されているだけで、関係は歌詞中では語られていない。文としては動詞がなく不完全である。NHK (1965:30) では意訳している。

hoo は言語音としては意味のないかけ声であり、毎行の最後に繰り返されているので、神謡形式のリフレインのようなものと考えることができる。その場合は本文は

Apka topa
Ho topa
Usus kin a
Ho kin a

となり、各行の最後は topa と kina が 2 回ずつ繰り返されていることになる。topa と kin a はともに母音 a で終わっているので、母音 a による脚韻である。

3-4. 子音による脚韻

音節末子音による明確な脚韻はみられないようである。ただし、最後の音節の子音同士で押韻しているようにみえることもある。

3-4-1. 子音による脚韻とは何か

アイヌ語詩は原則として歌謡であり、各行末は持続して発声されるため、子音による脚韻は困難なはずである。しかし音節単位でみれば子音の一致は可能である。

資料3（再掲）

楽譜番号 60 (NHK1965:71) (採録地:釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

Hesi punkar sorarpa	ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)
Wasipetun casi	ワシペッ川の砦の
Kanras kasi ketunke	屋根板の上がはがれた (?)
Hawo punkar hawoppa	音がした 蔓で (?) 音がした

※kanrasi と表記

この歌では、第1・4行の行末はどちらも pa で音節の子音と母音がともに一致している。これは複数標示の同じ接尾辞だが、sorar-pa と hawop-pa のように単語自体は別である。もちろん、たんに詩の意味内容によってどちらも複数標示がついているだけであり、音が一致したのはその結果にすぎず意図的ではないのだ、という可能性ももちろんある。

だが、もしもこれが意図的になされているとしたら、これは母音が一致した母音韻なのだろうが、子音も一致はしている。音節同士で onset オンセット (C_1VC_2 の C_1) が一致するものを頭韻、rime ライム (C_1VC_2 の VC_2) もしくは coda コーダ (C_1VC_2 の C_2) が一致するものを脚韻と呼ぶなら、これは「行末における頭韻」である。丹菊逸治 (2018) では「最終音節における C_1VC_2 の任意の C_1 と C_2 が一致する押韻」つまり、「オンセット同士、コーダ同士、もしくはオンセットとコーダが一致する押韻」がアイヌ韻文の脚韻なのではないかと推測したが、それが偶然か否かの検証は、行頭母音に比較すると困難である。比較的検証しやすいと思われる叙事詩に関しても、田村すゞ子・平賀サタモ (1993) の行末音節でオンセット (C_1) 同士が一致する比率は偶然より高いわけではない。また、実際には（ウポポにせよ叙事詩にせよ）歌詞の行末に閉音節が来る例は極めて少ない。

3-4-2. 子音による脚韻と思われる例

本稿での検証は主として行頭における頭韻、特に母音韻に絞り、アイヌ韻文における脚韻については今後改めて確認していきたいと考えている。ここでは脚韻と思われる例を紹介するだけにとどめておく。

資料 14

楽譜番号 81 (NHK1965 : 83) (採録地 : 沙流川流域)

hetunup / hekarkar	エトウヌプ (酒容器) が転がる (?)
hekannisi po / hesuye	天空が揺れる
sa tomari ya / sa ye ya	○ 先の港の岸 (?) 先の岸 (?)

この歌を 3 行詩形式とすると、第 2・3 行末の *ye* と *ya* は意識的にそろえられているようと思える。また、第 1 行前半部の最終音節 *nup* と第 2 行最終音節 *po* の子音 *p* も、偶然ではないように思われる。というのは *hetunup* の-p は単語の一部だが、*hekannispo* の-po はおそらく指小辞であり、本来はなくてもよいはずだからである。つまり *hetunup* に合わせて *hekannisi* に *po* が付けられた可能性がある。

次の例では、おそらく行末最終音節の母音は変えられているが、子音は保存されている。

資料 15

楽譜番号 138 (NHK1965 : 127) (採録地 : 近文)

(丹菊試訳)	
Ota nisike oman	砂浜の薪を取りに行く (?)
Nisike se tori	薪を運んで (tori は語義不明)
Ota nisike se toro	砂浜の薪を取って背負って (?) (toro は語義不明)
Hun	フン (かけ声)

NHK (1965:128) では「歌詞の意味は『砂浜を薪運びに行く……』といっているようであるが、なぜこんな歌が明らかでない。」とする。*ota nisike oman* 「砂浜を薪運びに行く」(日常語文体であれば *nisike* の後に接続詞があってもよいかもしれない) ははっきりしているが、次の *se tori* と *se toro* は意味が分からぬ。したがって、*se tori* と *se toro* のどちらが本来の形なのかもわからぬが、おそらく本来は同じ音形だったのに、最終母音だけ i

と o に分かれたのは間違いなさそうである。

次の例では最終音節が-run, we, wa, wa となっている。第 1 行は一致とはいえないかもしれないが、第 2 行末音節-we と、第 3・4 行末の wa は子音をそろえているように見える。

資料 1 (再掲)

楽譜番号 16 (NHK1965:35) (採録地: 近文)

(丹菊試訳)

Asipet par un	アシペツ川の
Kamuy maw e	神の風
Kantori wa	天界から
Pitori wa	神 (?) から

なお、持続時間が同じ部分を「/」で区切って示せば以下のようになる。

Asipe pa / run k**a**
muy maw / -e
Kantori / wa pi-
-tori / w**a**

3-5. 母音による繰り返し韻

行頭と行頭で音を一致させる行頭韻、行末と行末で音を一致させる行末韻など、複数の行にまたがる押韻のほかに、1つの行の内部で同じ音を繰り返す「繰り返し韻」がある。「繰り返し韻」は母音によるものと、子音によるものがある。

資料9（再掲）

楽譜番号7（NHK1965:29）（採録地：千歳）

（丹菊試訳）

Ororo pinne owa heya	オロロ（語義不明）雄が集って ヘヤ
Owa cisinere	集って鳴く（？）
Apka topa owa hey a	雄鹿の群れが集って ヘヤ
Owa cisinere	集って鳴く（？）

（NHK1965:29 掲載訳）

狼の雄の群がどっさり
どっさりさわいでいるよ
強い雄鹿がどっさり
どっさりさわいでいるよ

第3行 **apk**a** top**a** owa hey**a**** は単語（あるいは2音節単位）が全て **a** で終わっている。これは「繰り返し韻」である。「繰り返し韻」には「繰り返し頭韻」と「繰り返し脚韻」がある。ここでは「繰り返し脚韻」であり、ちょうど4打の裏（ウラ）拍にあたる。

3-6. 子音による繰り返し韻

資料3（再掲）

楽譜番号 60 (NHK1965: 71) (採録地: 白老浜)

(丹菊試訳)

<u>Hesi</u> punkar sorarpa	ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)
<u>Wasipet</u> un casi	ワシペッ川の砦の
Kanrasi kasi ketunke	屋根板の上がはがれた (?)
<u>Hawo</u> punkar hawoppa	音がした 蔓で (?) 音がした

田村すゞ子(1987: 45)に類例と解説があり、kanras は板屋根の板、ketunke は「はがれる」という意味だという。sorarpa は田村訳では「見えてきた」。試訳では so-rarpa 「床を・押さえつける」とした。hesi は語義不明。hawo はかけ声だが、NHK(1965: 72)では hawot 「音がする」、hawoppa はその複数形と解釈している。

第3行の kanras kasi ketunke は3単語の各語頭および最後の語の最終音節がいずれも子音 k で始まる、「繰り返し頭韻」である。位置的にも4打を打つときの表(オモテ)拍にある。

なお、NHK(1965)では訳は付されていないが、次の類例が訳とともに掲載されている。

資料 16

楽譜番号なし (NHK1965 : 72) (採録地：釧路地区白糠和天別)

Haw o punkar	…蔓で
haw oppa	……
Hasi kuruka	灌木の上を
sorarpa	片付けて
Kasi pet tun casi	ハシペツの砦の
kanrasi kasi	一本の割木を上に
ketunke	かぶせ

これはこれで美しい行頭子音韻が並んでいることになるが、各行に2打を打つと第5行がうまく合わない（この行には3打が必要である）。この歌い方が楽譜例と同じだとするとむしろ以下のような4行詩とるべきであろう。

Haw o punkar haw oppa	…蔓で……
Hasi kuruka sorarpa	灌木の上を片付けて
Kasi pet un casi (休止)	ハシペツの砦の
Kanrasi kasi ketunke	一本の割木を上にかぶせ

(丹菊による再構、訳は NHK1965 : 72 をそのまま用いた)

4. 繰り返し語句

複数の行で同じ語句が繰り返されている歌がある。これらは同じ行が繰り返されていることもあるが「行の一部の語句のみが複数行で一致する」場合もある。「一部のみ一致する」という点では押韻と共通するが、押韻と異なり「一致した部分」は同じ意味を有している。「押韻」は「意味は異なるが音が一致する」という現象であり、「繰り返し語句」は「行全体の意味は一部異なるが音が一致する」という現象である。つまり「繰り返し語句」は「押韻より音の一致度が高い」ともいえよう¹²。繰り返し語句は押韻と同じく、行頭にある場合、行末にある場合、そして行内部で繰り返される場合がある。また、押韻とは異なる特殊なものに「同一行の繰り返し」と「しりとり型配置」による関係文がある。

4-1. 繰り返し語句が行頭にあるウポボ

先にあげた NHK (1965:127) 楽譜番号 138 は行頭で一致している例である。

資料 15 (再掲)

楽譜番号 138 (NHK1965:127) (採録地: 近文)

(丹菊試訳)

Ota nisike oman	砂浜の薪を取りに行く (?)
Nisike se tori	薪を運んで (tori は語義不明)
Ota nisike se toro	砂浜の薪を取って背負って (?) (toro は語義不明)
Hun	フン (かけ声)

上の詩は 4 行詩形式としてみた場合、第 1・3 行の行頭が繰り返し語句 ota nisike になつていて、残り 2 行は押韻していない。

¹² 詩は発話であるから、発話内容が先に進まなくてはならないが、同時に繰り返し感覚を持たせたい。押韻は「話を先に進めつつ、音を繰り返す」ための技法である。同一行を繰り返せば、音は完全な繰り返しになるが、話が先に進まなくなってしまう。「繰り返し語」はその中間的な技法ともいえる。すなわち、「音は不完全に繰り返され、話は少しだけ先に進む」のである。

4 – 2. 繰り返し語句が行末にあるウポボ

繰り返し語句が行末にあり、残りの行に押韻がみられない例もある。

資料 17

楽譜番号 123 (NHK1965 : 113) (採録地 : 十勝地区伏古)

(丹菊試訳)

Kanto horikasi wa	天空から
Kamuy ran mat heene	神が降ろした女神
Piwsee piw	バリバリ響く
Kanto heene	天空に

行頭・行末でたんに 1 組の母音が一致するだけならば偶然の可能性もあるが、このように語句が一致する場合にはもちろん偶然ではありえない。また、この heene は語義が明確ではなく、意味的な理由で一致しているとは限らないのである。このような例は、行末においても音の一致すなわち行末韻（脚韻）が志向されている可能性を示唆する¹³。

¹³ 「繰り返し語句」と押韻は類似の現象という可能性が高い。日本の和歌においても、古代歌謡に頭韻現象が知られているが、福田智子・南里一郎・竹田正幸 (2002) は『万葉集』に同一文字列の反復が多くみられることを指摘している。

4 - 3. 最終行内の繰り返し語句

詩の最終行などに繰り返し語があることがある。前項における繰り返し語は、頭韻と同じく複数の行の行頭部に繰り返されるが、このタイプでは「繰り返し韻」と同じく、同一行内で同じ語句が繰り返される。

資料 18

楽譜番号 142 (NHK1965:131) (採録地：十勝地区伏古)

(丹菊試訳)

Pon paykar an kor	小さな春が来た
Iwa se kotor	靈山の背後に
Apka kotoyse	雄鹿が群れをなす
Iwa topenni	靈山のイタヤカエデを
Kepu kepu kepu	かじるかじるかじる

(NHK1965 : 131 に付された訳)

早春になると
山の斜面に
雄鹿が集まって
イタヤの木を
かじる かじる かじる

NHK (1965:131) では第 3 行第一語は apuka になっているが apka の誤記であろう。なお、*kepu という語形は主要な辞書・語彙集には収録されていないが、kepkepu「かじる(他動詞)」という語の存在からすると、kepu という語形があってもおかしくない。

最終行 kepu kepu kepu では、*kepu 「剥ぐ(?)」が同一行内で繰り返されている。このような歌の最後部分にある同一行内の繰り返し語からはいずれもとつてつけたような印象を受ける。歌も元来は以下のような 4 行詩形式だったのではないかと思われる。kepu の繰り返しは、ウポポとして複数人で歌われるようになったのちに追加されたのではないか。

(丹菊による再構形)

Pon paykar an **kor**

Iwa se koto**or**

Apka kotoyse

Iwa topenni kepu (あるいは kepkepu)

この再構でも、第2・4行で繰り返し語 iwa が用いられていて、残りの行は行頭で押韻していない（つまり、最初から頭韻はなかった）。

なお、この歌は歌い方も変わっている。持続時間の配分を「/」で区切って示せば以下のようになる。それぞれ上から 2打・2打・3打・2打・3打ずつと思われる。

Pon paykar / an kor

Iwa se / kotor

Apka / kotoyse- / -e

Iwato / penni

Kepu kepu / kepu- / -u

4-4. 同一行の繰り返し

同一行の繰り返しには、歌詞中の2行以上が同一行になり、他の行が異なっている場合と、同一行だけを繰り返すものがある。

4-4-1. 4行中2行が繰り返される形式

資料 19

楽譜番号 12 (NHK1965:31) (採録地: 鶴川流域春日)

(丹菊試訳)

Ho topa ho	ホ 群 ホ
Uses kina ho	蹄の草 ホ
Apka topa ho	鹿の群 ホ
Ho topa ho	ホ 群 ホ

資料 13 (楽譜番号 8 本書 p25) の類歌である。この歌では、最初の行と同一の行が最後に繰り返されている。はさまれた2行は別の語句になっている。

行全体が繰り返される位置は歌によって決まっているようである。**AAABC** (楽譜番号 133 など)、**ABAC** (楽譜番号 110 など)、**ABC A** (楽譜番号 12 など)、**A BCB** (楽譜番号 89 など)、**ABCC** (楽譜番号 115)、の全ての組み合わせが実在する。

なお、ウポポ以外のジャンルでは4行中第3行のみが異なり、残り3行が同じ行になっているもの (AABA)があるが (楽譜番号 160 など)、NHK (1965) に掲載されたウポポ 159 歌にはそのような例は見当たらない。

4-4-2. 同一の1行のみを繰り返す形式

資料 20

楽譜番号 53 (NHK1965 : 65) (採録地 : 静内地区新冠万世)

(丹菊試訳)

Hanru hae ruhu wa ハンルハエ (かけ声) 道から
Hanru hae ruhu wa
Hanru hae ruhu wa

NHK(1965 : 65) には「意味はよくわからないが次のようにも解される」として「足跡がわからない／ツンドラ地帯で」という訳を掲載している。

NHK(1965) では、同一行の繰り返しでも各回の音の高低パターン（いわゆる旋律）が異なる場合は全回を楽譜化している。これらは同一行の繰り返しによる複数行詩と考えるべきであろう¹⁴。同一行 1 行の繰り返し回数は 2~6 行まで幅があるが、1 行が 1 回だけ歌われるとおぼしき例はないからである。なお、この形式の歌の多くには「繰り返し韻」が含まれている。

¹⁴ 音の高低パターン（いわゆる旋律）と語句や詩形式の関係については今後の研究課題としたい。この繰り返し回数が何によって決まるのかについても現時点では全く分からぬ。

4-4-3. 同一の2行を2回繰り返す形式

資料 21

楽譜番号 149 (NHK1965 : 136) (採録地 : 沙流川流域荷負)

(丹菊試訳)

Tama kuto 玉が帯についた (?)
Hae ハエ (かけ声)
Tama kuto
Hae u

NHK (1965 ; 136) では類歌をあげて「首飾りの珠の紐が切れて、珠がちらばったときの驚きが、そのままウポポになったものであるといっている」とする。

この歌は各行が 4 音節になっている。tama kuto と hae が同じ長さで歌われていることから、tama kuto hae を 2 回繰り返す 2 行形式ではなく、4 行形式とみるべきであろう。

このような 2 行の繰り返しには ABAB 形式、AABB 形式がある (ABBA 形式はないようである。繰り返し歌うので AABB と差がないためであろう)。2 行の繰り返し形式の歌にはこの歌のように意味の分かる語句が含まれるものは少ない。

資料 22

楽譜番号 110 (NHK1965 : 102) (採録地 : 釧路地区美幌)

(-e) Hu wa e / iyo ey o
wa hew / ro hae-
-e hu wa e / iyo ey o
wa hew / ro ha e- (語義不明)

歌詞が全て語義不明ではあるが、歌い出しがウラ拍になっているので、実際には以下のよ
うな 2 行を 2 回繰り返している 4 行形式としてみるべきであろう。

Hu wa e iyo ey o
Wa hew ro hae

4 – 5. 関係文的な繰り返し語句

先行する行の行末と、後続する行の行頭に同じ語が繰り返されることがある。これは一種の関係文であり、統語論的な現象もある。

資料 23

楽譜番号 121 (NHK1965 : 110) (採録地 : 静内地区昭和)

(丹菊試訳)

Kani rewka	金属の橋
Rewka pake	その橋の頭が
Topan topan	たわむ たわむ
Topan rewke	たわんで曲がる

Batchelor (1938 : 506) 「Topan-topan v.t. To move or shake about.」とある。何かの影響で揺れる、すなわち「たわむ」ということかと思われる。

第 1・2 行では kani rewka rewka pake 「金属の橋 橋の頭」という叙事詩文的な関係文が用いられている。口語文体であればたんに kani rewka pake 「金属の橋の頭」である。このような関係文については、金田一京助 ([1908]1992 : 20) は「尚、『繰返し』の今一つの他の仕方は、前の句の末の語を、次の句の頭に今一遍繰返して綾を成して行く方法である」、田村すゞ子 (1987 : 18) は「位置名詞などの前で、韻文ではよく、その前の名詞句の最後の名詞を行の頭にくり返す : páse kotan/kotan tapkasi.」と指摘する。丹菊逸治 (2018 : 24) でも「しりとり型母音配置」として押韻と同じような「繰り返し」の詩的技法とみなしたしかしこれはたんに音の上の効果を狙った「繰り返し語」ではなく、叙事詩的な関係文構造というむしろ統語論的な現象とみなすべきかもしれない。

なお、第 3 行の内部で topan 「たわむ (?)」が 2 回繰り返されている。この詩には、行頭部に繰り返し語があるだけで頭韻はない (母音脚韻は 4 行で踏んでいる)。また、第 3・4 行の行頭では頭韻と同じような「繰り返し語」としても topan が用いられている。

5. 交差配列による行頭韻

資料 24

楽譜番号 29 (NHK1965 : 46) (採録地 : 静内地区田原)

(丹菊試訳)

Cupka wa	東から
kamuy ran	神が下りた
Iwa teksam	小山の近くに
orew	とまったく
Iwa teksam	小山の近くに
kani maw ne	金属音が
cinu	聞こえた

(NHK1965 : 47 掲載訳)

東の方から
神がおりて
岩角に
とまったく
岩角に
美しい響が
聞えた

この歌では行頭の母音と子音が c-k-i-o-i-k-c と並んでいる。いわゆる交差配列である。交差配列¹⁵は通常は 1 行の内部で母音の繰り返し韻として好まれる。行頭でこのように母音と子音が整然と並んでいる歌は管見ではこの歌だけであるが、類歌が全道的に分布しているのでかなり好まれたのであろう。

¹⁵ アイヌ口承文芸において交差配列が好まれていることは、大喜多紀明（2012）とそれに続く一連の研究で指摘されている。この歌の行頭交差配列韻については丹菊逸治（2018：44）が指摘している。

6. 1行の音節数

1行の音節数は原則として8音節以内である。ウポポとして歌う場合、sintoko シントコと呼ばれる漆器の蓋等を軽く叩いて拍子をとるが、その際には2打×2回=計4打を音の高低パターン¹⁶の単位としており、1打につき2音節を発声する。ただし、全体が1行4音節で構成されている場合もある。その場合は1行あたり4打ではなく2打で歌われる。1~4音節の行と5~8音節の行が混在している場合は、たいていは続けて歌ってしまうが、短い行に休止を足したり、適宜母音を伸ばしたりして長い行に合わせることもある。

次のものは1行あたり2打(4音節)の4行形式である。

資料 25

楽譜番号 82 (NHK1965:83-84) (採録地:近文)

Hetunup
He kar kar
Hekan nisu
He sue

歌い方を無視したとしても、これらを十数音節の1行詩あるいは、7音節前後の行からなる2行詩を考えることは困難であろう。実際にはもっと短い単位で頭韻もしくは脚韻を意識しているからである¹⁷。やはり、行の長さが通常より短い(4打ではなく2打分である)4行詩になっているとみるべきであろう。NHK(1965)に2行詩形式で掲載されているものほとんどはこれにあたる。

¹⁶ いわゆる「旋律」であるが、本稿では「音の高低パターン」と呼ぶ。実際にはアイヌ伝統歌謡は言語音から音の高低が確定する「朗唱」であり、言語音と無関係に作られうる「旋律」という用語は適切ではないからである。

¹⁷もちろん「規則的に繰り返し語句が入る1行詩」などとみなすことはできようが、それはあまり意味がないように思われる。

7. 行頭に母音韻・繰り返し語句を持たない 6 例の検討

アイヌ語の母音は 5 つなので、4 行あれば偶然でも 8 割程度は「2 個以上の母音の一致」がみられるはずである。以下は 4 行形式の行頭で母音の一致が偶然生じる確率である。

表 2. 4 行詩において偶然押韻が生じる確率

押韻の種類	確率 (%)
2 行のみ一致	57.6
2 行の一致が 2 組	9.6
3 行の一致	12.8
4 行全てが一致	0.8
4 行全てが相違	19.2
合計	100

このように 4 行形式では偶然でも母音が一致しやすい。一つでも一致がある確率は 81.8% である。したがって行頭や行末で母音が一致していても大半は作為ではなく偶然であろう。また、「繰り返し語句」があれば、行頭母音も当然一致するが、これは作為であるにしても「押韻」ととはいえないであろう。

しかし、NHK (1965) のウポポ 159 歌では、うち 153 歌に「行頭での母音の一致」(繰り返し語句による一致、同一行の繰り返しによる複数行詩を含む) がみられる。この比率は 96.2% であり、偶然より高い比率である。

行頭に繰り返し語句も押韻もみられないのは以下の 6 歌である。

楽譜番号 1、22、28、33、120、159

これは全 159 歌の 3.8% にすぎず、偶然で生じる確率 19.2% を考慮すると少ない。以下ではさらにこれら 6 歌について「行頭母音がかかわる別種の押韻の有無」を 1 つずつ検討する。

7-1. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポボ（その1／6）

資料 26

楽譜番号 1 (NHK1965 : 26) (採録地 : 近文)

A ho he
Ho ho he (語義不明)

全体が意味のない音で構成されているが、形式的には数少ない2行形式とみてよいであろう。最初の音節が第1行はa、第2行はhoというように変えられている。残りの部分ho heは同じである。これはむしろ「同じ音の繰り返しで冒頭音節のみ変えてある」のである。つまり「繰り返し語句」の変形であり、押韻と同じような「繰り返し」効果がすでにがあるので、押韻をさらに重ねなくともよいはずである。また、言語音としては意味がないho heという音は同じ子音hと異なる母音o, eの組み合わせになっている。つまり一種の繰り返し韻である。

なお、4行形式として解釈すれば、以下のような数少ない1行1打形式である。

A ho-
●-He ○
Ho ● ho-
●-He ○ (持続時間で切った場合)

A ho
He
Ho ho
He (言語音 (?) で切った場合)

7-2. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポボ（その2／6）

資料 27

楽譜番号 22 (NHK1965:89) (採録地: 沙流川流域去場)

(丹菊試訳)

A tuy so ka ta hua ra e hoy	海原の上で フアラエ ホイ
O pinne cir[i]p o hua ra e hoy	雄の小鳥が フアラエ ホイ
Tepakan tepakan hua ra e hoy	羽ばたく羽ばたく フアラエ ホイ
S an ota ka ta hua ra e hoy	村の前の浜で フアラエ ホイ
O matne cir[i]p o hua ra e hoy	雄の小鳥が フアラエ ホイ
Rimimse rimimse hua ra e hoy	叫ぶ叫ぶ フアラエ ホイ

(NHK(1965:40)に「tepakanは水禽が水の上で羽搏きすることをいう」とある)

(NHK1965:40掲載訳)

海の上で／ウワラエ ホイ
雄の小鳥が／フワラエ ホイ
あっぷあっぷすると／フワラエ ホイ
浜辺では／フワラエ ホイ
雌の小鳥が／フワラエ ホイ
びっくりして騒ぐ／フワラエ ホイ
(改行は適宜／に変えた)

2つの3行詩連で構成されている。各詩連内部では第1行の行頭・行末母音がともにa、第2行の行頭・行末母音がともにoとなっている。各詩連内部では行頭で母音韻は存在しないが、第1詩連と第2詩連の第1行同士、第2行同士は同じ母音a, oとなっている。つまり各詩連の第1行同士、第2行同士という対応行頭が押韻する。例は少ないが叙事詩等にもみられる技法である。

このような2連3行詩形式は、4行詩的から派生して作られたと考えてよいだろう。すなわち、第1詩連第3行 tepakan tepakan、第2詩連第3行 rimimse rimimseという押韻していない繰り返しを1回にして第2行の末尾につれば（そして hua ra e hoy というリフレインを除けば）、以下のような5・8・5・8音節の4行詩形式になる。

Atuy so ka **ta**

● pinne cir po tepak**a**n

San ota ka **ta**

● matne cir po rimimse

7-3. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ（その3／6）

資料 28

楽譜番号 28 (NHK1965 : 45) (採録地 : 東静内)

(丹菊試訳)

Cupka un mat 東の女性（女神）が
Atte sinta カけた揺り籠
Sinta atka その揺り籠の紐
O ha o オ ハ オ（かけ声）

(NHK1965 ; 45 掲載訳)

月の上の女神の
さげたゆりかごの
ゆりかごの紐
オ ハ オ

第1行が u-a-u-a という繰り返しの母音配列になっている。また第2・3行は atte sinta sinta atka 「かけた・揺り籠の、揺り籠の・紐に」という4語の頭母音が a-i-i-a という交差配列になっている。第4行も母音が交差配列である。つまり

Cupka un mat u-a-u-a (音節単位)
Atte sinta / Sinta atka a-i-i-a (単語の語頭)
O ha o o-a-o (音節単位)

なお、この歌詞は脚韻が優位である。行単位はもとより、cupka / un mat / atte / sint^a / sint^a / atka / o ha o という2音節単位でも、7つのうち5つまでが a で終わっている。

Cupka / un mat
Atte / sint^a
Sint^a / atka
O ha o

そしてこの詩は音節の軽重の配列も以下のようにそろっている。●は CVC、○は CV 音節である。

●○●●	Cupka un mat
●○●○	Atte sintā
●○●○	Sintā atkā
○○○	O ha o

第 1~3 行まではほぼそろっている¹⁸。第 1 行末と第 2・3 行末は○●（軽重）が揃っていないが、mat, -ta, -ka のように行末母音が揃えられている。

以上のように、この詩では行頭部も含めて別の音の作為がなされているので、それが理由で行頭での押韻を志向しなかった可能性が考えられよう。

なお、この歌はもともとは叙景詩として作られたものではなかったようである。NHK (1965: 45) の解説には、特定の儀礼と結び付けられた特殊なウポポである、本来は子守歌だった、などの証言が紹介されている。また、歌詞中の atte sintā sintā atkā「かけた振り籠、その振り籠の紐」という叙事詩的関係文が見られることからは、叙事詩 (yukar) あるいは神謡 (oyna) など何らかの韻文物語の一部だった可能性が考えられる。散文であれば atte sintā atkā「かけた振り籠の紐」でよい。このタイプの関係文は NHK (1965) の掲載のウポポ 159 歌中、この楽譜番号 28 (資料 28)、楽譜番号 120 (資料 30)、楽譜番号 121 (資料 23) の計 3 歌にしかみられない (第 2 章でとりあげる平賀サタモ [1959] 1993 では 310 詩連中 21 詩連にみられる)。楽譜番号 120 は楽譜番号 28 同様に押韻を持たない歌である。楽譜番号 121 はおそらく楽譜番号 120 の最後の 1 行が繰り返されるようになったものである。

¹⁸ アイヌ語韻文の formula 内の行同士でしばしば音節数がそろえられているという現象については金田一京助 ([1933]1992: 296) Philippi (1979: 30) が叙事詩文体について指摘している。金田一京助も Philippi もアイヌ韻文に韻律 (metre つまり、CVC 音節と CV 音節の規則的配置) を認めてはいない。実際には丹菊逸治 (2018) で指摘したように、音節数だけでなく音節の配置パターンがそろえられる、という韻律がみられる。

7-4. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ（その4／6）

資料 29

楽譜番号 33 (NHK1965: 49) (採録地: 十勝地区音更)

(丹菊試訳)

Cupkihi kamuy	神々しい月の光が
Iwani kurka oman	アオダモの上を照らし行く
Etannewa oman	長く伸びて行く

(NHK1965: 49 掲載訳)

月の光の神が
アオタモの影の上を行く
それを長くして行く

第2・3行末で oman という同語の繰り返しがあるが、それ以外は押韻も繰り返し語もない。だがこの詩では資料 28 (楽譜番号 28) と同様、叙事詩によくみられる不完全韻¹⁹が用いられている。不完全韻というのは、「音が全体として似た語句」同士という「韻」である。ここでは、第2行前半部 iwani kurka と第3行前半部 etannewa が不完全韻となっている。

i-wa-ni kur-ka
e-tan-ne w-a

のように、i と e、wa と tan、ni と ne、kur と w、ka と a が対応し、全体として「音がよく似た語句」になっている。

第2行前半	i	wa	ni	kur	ka
第3行前半	e	tan	ne	w	a
音の共通性	前舌の狭め母音	母音 a	子音 n 前舌の狭め母音	円唇音	母音 a

この歌には資料 28 (楽譜番号 28) とは異なり、もともと韻文物語の一部だったという証言はないようだが、同じく叙事詩等に多用される不完全韻を用いている。特殊な行頭音配列を持つ楽譜番号 29~32 の類歌でもある。丹菊逸治 (2018: 44) を参照のこと。

¹⁹ 第2章第6節参照

7-5. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ（その5／6）

資料 30

楽譜番号 120 (NHK1965 : 110) (採録地 : 十勝地区芽室太)

(丹菊試訳)

Kane <u>rexwka</u>	金属の橋
rexwka no ho sike	橋の真ん中
topan <u>rexwke</u>	たわんで曲がる

(NHK1965 : 111 掲載訳)

丈夫な橋
橋の真中が
しなりまがる

ローマ字表記の x は NHK (1965 : 110) に従ったものである。

x で表されている部分は、おそらく裏声を使っている部分であり、言語音ではないであろう。また、no ho sike の ho も no が裏声を用いて伸ばした部分であろう。sike の母音 i も聞き間違いの可能性が高い。したがって、言語音としては

Kane rewka
rewka noske
topan rewke

というような語形と思われる。この歌は叙事詩形式の特徴を備えている。散文体であれば kane ruyka noski 「金属の橋の真ん中」となる関係文を kane ruyka, ruyka noski 「金属の橋・橋の真ん中」と 2 つの名詞句に分割して 2 行にするのは叙事詩文体の特徴の一つである(第 4-5 節参照)。また第 1 行 rexwka<riwka 「橋」と rexwke<rewke 「曲がっている」は、歌謡以外の韻文でよく用いられる不完全韻を踏んでいる。ただし行頭部分ではなく行末部分である。

先にあげた資料 25 はこの歌の類歌であり、おそらく本来は 3 行詩形式だったものを、topan を繰り返した第 3 行を加え、4 行詩形式に改変したものである。

資料 23（再掲）

再掲 楽譜番号 121 (NHK1965 : 110) (採録地：静内地区昭和)

(丹菊試訳)

Kani rewka	金属の橋
Rewka pake	その橋の頭が
Topan topan	たわむ たわむ
Topan rewke	たわんで曲がる

資料 30 のように、3 行形式で行頭に母音韻や不完全韻を持たないものは不安定であり、だからこそ、資料 25 は topan を繰り返して行を増やし、安定した 4 行形式に改変されたのではないだろうか。

なお、kane ruyka 「金属の橋」という文学的修辞は「余興踊り歌」ジャンルに分類されている楽譜番号 283 にもみられる。

資料 31

楽譜番号 283 (NHK1965 : 267) (採録地：釧路地区塘路)

(丹菊試訳)

Konkani ruyka ho ruyka	金属の橋 ホ 橋 (ホはかけ声)
Konkani ruyka ho ruyka	金属の橋 ホ 橋

NHK (1965 : 267) では konkani ruyka ho ruyka を 2 行繰り返す 2 行詩のように扱われているが、以下のような 4 行形式とみてよいであろう²⁰。

Konkani ruyka

Ho ruyka

Konkani ruyka

Ho ruyka

²⁰ NHK (1965 : 267-268) でも 2 行の歌詞が異なる類歌が 4 行形式にまとめられている。

7－6. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ（その6／6）

資料 32

楽譜番号 159 (NHK1965 : 143) (採録地 : 静内)

(丹菊試訳)

Yuk top**a** ran na 鹿の群が下りてきたぞ
Cipes**oro** soro hoy 船に（？）沿って下りてくる ホイ

(NHK1965 : 143 掲載訳)

鹿のかたまりが天降ったよ
吾里川にそうておりる

NHK (1965 : 144) では cip は cipet 「我々の川」 の意とするが、 そう解釈するのは難しい。

この歌の持続時間が同じくなる位置を「/」、 休止を「○」で示せば、 歌い方は以下のようになる。

Yuk top**a** / ran na
Cipes**oro** / soro
Ho**y** / ○

この歌は数少ない3行形式で、 1行目の後半が母音 a、 2行目の後半が母音 o による繰り返し韻になっている。 おそらく行の大半部分が繰り返し韻になっているので、 行頭母音を踏まずにすませているのであろう。 本来は、

Yuk top**a**
ran n**a**
Cipesor**o**
soro ho**y**

のような脚韻優位の4行形式だったとも考えられる。

ただし、 丹菊逸治 (2018 : 42) で提案したように半子音 y が母音 i と押韻、 つまり yuk の y と cipesoro の i が行頭母音を踏んでいる可能性もある。

7-7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ 6 歌のまとめ

以上、行頭に母音韻も繰り返し語句も持たない 6 歌の詩法を確認した。その結果は以下のとおりである。

表3.

特徴 資料番号 (楽譜番号)	4行形式 で母音韻	行頭 交差配列	行頭 不完全韻
26 (楽譜 1)			
27 (楽譜 22)	○		
28 (楽譜 28)		○	
29 (楽譜 33)			○
30 (楽譜 120)			
32 (楽譜 159)			

4行詩形式と解釈すると行頭母音で押韻しているものが 1 歌ある。次に、行頭母音を巻き込んだ交差配列を持つものが 1 歌、行頭母音を巻き込んだ不完全韻を持つものが 1 歌ある。これら 3 歌は「行頭母音がかかわる押韻」がなされているわけである。したがって、行頭母音がかかわる押韻現象が全くみられないものは 3 歌、すなわち資料 26 (楽譜番号 1 本書 p43)、資料 30 (楽譜番号 120 本書 p49)、資料 32 (楽譜番号 159 本書 p51) だけである。

9. 第1章の結論

NHK (1965) のウポポ資料 159 例で行頭押韻の確認を行った。行頭における母音の一致は偶然より高い比率（153 例 96.2%）で生じていて、作為的な押韻が行われている可能性が高い。行頭における母音の一致がみられないものは 6 例（3.8%）あるが、うち 3 例には行頭母音がかかわる別種の押韻が用いられている。いかなる意味でも行頭部に押韻を持たないのは 3 例（1.9%）のみである。

このように NHK (1965) のウポポ資料にかんするかぎり、偶然とは思えない高い比率（156 例 98.1%）で押韻が確認できた。

第2章 アイヌ叙事詩の詩連構造・行頭母音韻・不完全韻

概略

平賀サタモによって 1959 年に語られた叙事詩には、①3・4 行詩連を中心とする詩連構造がある。②4 行詩連には偶然生じる確率（88.6%）より高い比率（94.3%）で行頭母音韻がある。③主として詩連内部の不完全韻が全体の半数以上の行で確認できる。

1. 目的

叙事詩の例として平賀サタモ²¹ ([1959]1993) をとりあげ、同テキストにおける、1. 詩連構造の存在 2. 行頭母音韻その他の押韻の存在 3. 不完全韻の存在 を検証する。

この叙事詩作品は、北海道鵡川町生まれの平賀サタモ（1895 年頃～1972）によって 1959 年に語られ、それを言語学者田村すゞ子が録音したものである。田村すゞ子は 1963 年に文字化作業を終え、1993 年に文字テキストが録音資料とともに公刊された²²。公刊されたテキストには語り手平賀サタモによる注釈がほどこされている（一部の文言の修正、行の追加など）。本稿では原則として録音資料の分析を行う。田村すゞ子・平賀サタモ（1993）掲載の加筆修正されたテキストと区別するために、録音資料（の文字化テキスト）を「平賀サタモ ([1959]1993)」とする²³。なお、本来はアイヌ口承文芸作品に題名はないが、田村すゞ子は「村焼き国焼き」（アイヌ語 Kotan sitcire Mosir sitcire）という題を付している。

平賀サタモ ([1959]1993) のローマ字表記は必ずしも田村すゞ子・平賀サタモ（1993）と同じではない（聞き起こし自体が異なることもある）。また、訳は田村すゞ子・平賀サタモ 1993 を参考にしているが丹菊による試訳である。u, ep などの虚辞はそのまま示してある（ただし文頭でも小文字のままにしてある）。行を例示する際には田村すゞ子・平賀サタモ（1993）で付された行番号を 4 桁の数字で行頭に付した。

²¹ 田村すゞ子（1996：付録頁 22）では「平賀サダ」として写真入りで掲載され、さらに「アイヌ名 Satamo サタモ、通称サダモ」としている。田村すゞ子編による刊行物では署名等に「サダモ」として表記されているが、ここではアイヌ語形として掲載されている「サタモ」を用いることにした。

²² 2020 年 3 月現在で早稲田大学リポジトリ <https://waseda.repo.nii.ac.jp/> からテキスト本および録音資料が公開されている。リポジトリで公開されているテキストは 1993 年の刊行物の撮影画像であり、物語本文のみで解説部分は含まれていない（図書館等に収蔵されている印刷版を参照されたい）。公開されている録音は mp3 フォーマットである。

²³ この録音資料には文字資料と異なりエディションの差は存在しないため録音時の年号を付することにした。

2. 平賀サタモによる 1959 年の語りにおける「行」

2-1. アイヌ韻文体の「行」

アイヌ民族の叙事詩は朗唱されるものである²⁴。upopo ウポポを始めとする伝統歌謡（叙事詩）、リフレインを持つ神謡（oyna オイナ、kamuyukar カムイユカラ）、叙事詩（yukar ユカラ、sakorpe サコロペ）、神への祈り（kamuynomi カムイノミ）など、口頭伝承（あるいは口承文芸）ジャンルによって歌い方は少しずつ異なるが、基本的にはいずれも朗唱である。つまり、歌詞（言語音）が重要であり、歌詞に合わせて音の高低パターン（いわゆる「旋律」）だが、器楽の曲とは異なり、歌詞つまり言語音から独立したものではない）が作られている。叙事詩の朗唱の際には、同じ持続時間を持つ一定の高低パターンが繰り返されるが、その単位を研究者は「句」「行（ぎょう）」などと呼んできた²⁵。本稿ではアイヌ韻文体を詩形式としてとらえ「行」と呼んでおく。

2-2. 1 行の音節数

アイヌ叙事詩の 1 行の音節数はさまざまである。とはいっても、ウポポとして複数人数で声を合わせて歌うためには、各行の音節数が一致しているほうが歌いやすい²⁶。したがって、歌い方にもよるが、各行の音節数はだいたい同じである²⁷。

一方、叙事詩は一人で歌うものであり、各行の音節数は一定ではない。だが、叙事詩を歌う際に用いられる repni レプニと呼ばれる拍子棒を叩くタイミングに収まっている必要はある。そのため基本的には 1 行の音節数は 4 から 7 に収まっている。このことは従来から指摘されており、5 音節の行が多いため「1 行 5 音節」が基本とみなされてきた²⁸。平賀サタモ（[1959]1993）においても、虚辞を含めれば全 1151 行中 1018 行（88.4%）、虚辞

²⁴ 散文調で語られることもある（rupaye ルパイエ）が、本稿では朗唱（sakoye）されたものを扱う。Philippi（[1979]1982：39）によれば、散文調の語りは本来は朗唱の前に準備される非公式のものである。

²⁵ 金田一京助（[1908]1992：18）では「句」と呼んでおり、久保寺逸彦（1977：23）でも「聖伝」（叙事詩とほぼ同じ形式のもの）に関して「句」という語を用いている。

²⁶ 金田一京助（[1908]1992：46）は 2 行単位で音節数がそろえられることを指摘している。また、金田一京助（[1933]1992：296）「七音節のような長句が来る場合には、すぐ次の句も七音節ぐらいの長さの句をもって対にする」

²⁷ sintoko シントコと呼ばれる漆器（日本から輸入された「行器」）の蓋などを叩いて歌うが、その際には 1 打あたり 2 音節が基本である。

²⁸ 金田一京助（[1933]1992：295）「その一口一口はたいていみな同じほどの五音節前後、短くて四音節、長くて六音節を止まりとし」

を含めなければ 763 行 (66.3%) が 5 音節行である。

歌う際には、最後の 2 音節の長さは 1 行の音節数にかかわらず決まっており、残りの音節が前半部にほぼ均等に配分される。ウポポを歌う際にシントコの蓋などを叩いて拍子をとることを「打」と呼ぶのと同様に、レプニを叩くタイミングを「打」と呼ぶ（記号●で表すこともある）。

例 1. 1129 anan korka アナンコロカ (4 音節)

歌	a	nan kor	ka	
レプニ	●	●		

例 2. 0001 iresucasi イレスチャシ (5 音節)

歌	i	re	su	ca	si	
レプニ	●			●		

例 4. 0068 kaparpe otcike カパラペオッチケ (6 音節)

歌	ka	par	pe	ot	ci	ke	
レプニ	●			●			

例 5. 0422 ki ruwe tas ta pan nek

歌	ki	ruwe	tas	ta pan	nek	
レプニ	●			●		

上記例 1～5 で、レプニ第 1 打に含まれる音節数は、それぞれ 2、3、4、5 だが、レプニ第 2 打に含まれる音節数は常に 2 である。そして第 1 打はそれぞれ原則として均等に 2 分割、3 分割、4 分割、5 分割されて、そこに 1 音節ずつが配分されるのである²⁹。

²⁹ したがって、アイヌの伝統歌謡・朗唱について「拍子」という概念の有効性には限界がある。「5 音節行の第 1 打は 3 拍子、第 2 打は 2 拍子である」などと分析するのは適切ではない。

2 – 3. 1行の最大音節数

平賀サタモ ([1959]1993) では1行の音節数は最大で7音節である。上に示したように、レプニ2打目には持続時間に余裕があるので、1打目と同じように5音節を押し込めれば理論的には全体で10音節まで入るはずである。しかし実際にはそのように歌われることはない³⁰。1行は最大7音節に決められている。

1行の音節数が最大7音節になっているのは、おそらくアイヌ語の言語構造を反映したものである。田村すゞ子 (1996) は、平賀サタモも多大な協力をした沙流方言辞書であり、口語も多く反映しているが、その見出しの音節数ごとの単語数を示せば以下のようになる。

表1. 田村すゞ子 (1996) の見出し語における1~10音節語の数

音節数	単語数	比率※	比率(累計)
1	647	6.8%	6.8%
2	2032	21.2%	28.0%
3	2623	27.4%	55.4%
4	2304	24.1%	79.4%
5	1377	14.4%	93.8%
6	389	4.1%	97.9%
7	145	1.5%	99.4%
8	39	0.4%	99.8%
9	15	0.2%	99.9%
10	5	0.1%	100.0%
合計		100.2%	

5音節まで全見出し語の93.8%、7音節までで99.4%が含まれる。8音節以上の語はわずか0.6%しかない。これはPhilippi (1979:30) が指摘する「1単語で1行を構成する」という志向と関連しているであろう³¹。どうしても8音節以上になった場合には2行に折り返すことも可能である³²。叙事詩で用いられる1人称叙述形式を考慮しても1人称接辞a=ア「私」という1音節が追加されるだけである（実際にはゼロ人称の3人称形式や、人称の付かない不定詞用法も多い）。

³⁰ これは韻律と関係していると思われるが、それについては今後の課題としている。

³¹ 金田一京助が「行」と呼ばずに「句」と呼んだのも、このためかもしれない。

³² Philippi (1979:30) はこういったいわゆる「行またがり」の多さも指摘している。

2-4. 1行の単語数

平賀サタモ ([1959]1993) の1行の平均単語数は2.2語である。これはPhilippi (1979:30)による「1行につき動詞または名詞が1単語」という指摘と合致するように思われる。アイヌ叙事詩は一般に短い修飾語句や接続詞などがついた名詞や動詞 (=名詞句や副詞句)が1行を構成する。そのため、单音節からなる動詞に意味を変えない接辞がついて音節数が増やされる、という技法が発達している。例えば、san サン「下りる」や ran ラン「下りる」という单音節語1語の代わりに接辞を足したり語幹重複をしたりして、ci-san-a-san-ke チサナサンケ³³「下りる」や ci-ran-a-ran-ke「下りる」という5音節語を派生させて用いる、などの例である³⁴。これは常に起こるのではなく、san サン「下りる」などの1語が1行にあたってしまう場合のみに起こる。例えば、

例 6 0491 u san=an hike ウ サナンヒケ「下りたのだが」(u は虚辞)

例 7 0288 san hum konna サンフムコンナ「下りる音は以下のごとく」

など接続詞や他の単語が後続する場合にはそのまま san が用いられる。たんに1行の音節数を増やしたいだけなら、次の単語を同じ行に入れてしまえばよいのだが、Philippi が指摘する「1行1単語志向」があるからこそ、それをせずに1単語の音節数を増やすのである。

ただし、叙事詩文体における「単語」の定義は若干問題を含んでいる。口語とは異なり、単語境界が確定しにくい例がみられるからである。本稿では、これらの例についても人称接辞 a=から動詞語幹までを1単語とみなしておく。

³³ cisanasanke という語自体は平賀サタモ ([1959]1993) では用いられていないが、田村すゞ子・平賀サタモ (1993:53) では第628行 u puspa kane の修正として現れている。

³⁴ ciranaranke の例は中川裕 (1997:205) による。

3. アイヌ叙事詩の「詩連」構造

3-1. 2行からなる対句や定型表現

アイヌ叙事詩に2行あるいは4行からなる定型表現があることは金田一京助([1908]1992:18)以来、繰り返し指摘されてきた。Philippi(1979)は最もまとめた記述である³⁵。ここでは定型表現の全体像の記述を試みることはしないが、行数と関連させて例示しておく。

最も多く見られるのは2行の対句である。

例 8	0012	Sikari cup noka	「満月の模様」
	0013	u Nin cup noka	「三日月の模様」

例 9	0071	Otu kesto ta	「2日の間」
	0072	Ore kesto ta	「3日の間」

2行にまたがる表現が対句になり、全体として4行の定型表現になっている場合もある。

例 10	0178	Ekimun kiroru	山へ向かう道は
	0179	sinna kane	また別に
	0180	Episun kiroru	浜へ向かう道は
	0181	sinna kane	また別に

例 11	0364	Kotan sitcire	村を焼き
	0365	Mosir sitcire	国を焼く
	0366	San ka tososo	棚を荒らし
	0367	Oypepi poro	その椀が大きい

4行からなる定型表現は、それだけで一つの文章となっている場合がある。

例 12	0382	Itak turano	その言葉とともに
	0383	iyonuytasa	今度は
	0384	itak kutcama	言葉の喉の響きが
	0385	uwetunuyse	金属音のように美しく響く

³⁵ 中川裕(1997)でもPhilippi(1979)を増補する形で分類が試みられている。

並行的な表現の3行からなる定型句もあるが、極めてまれである。平賀サタモ([1959]1993)には次の1例しかない。

例 13	0646	Kamuy cipanup	神の鉢巻き
	0647	Kamuy ninkari	神の耳環
	0648	Kamuy tamasya	神の首飾り

3行にまたがる表現が対句になった合計6行の定型表現もある。

例 14	0511	u Tuyma uk pe	遠くに草を食むときは
	0512	kokirawsika	角を背中に
	0513	omare kane	当てながら
	0514	u Hanke uk pe	近くに草を食むときは
	0515	kokirawriki	角を上に
	0516	roski kane	立てながら

3 – 2. 詩連

金田一京助以来のアイヌ語・アイヌ文学研究においては、対句や定型表現は他の「地の文」とは異なる特別な部分であり、それら定型表現だけが局地的に「3行のかたまり」(3行詩連) や「4行のかたまり」(4行詩連) をなしている、とみなされてきた³⁶。しかし、それ以外の部分も何らかの単位、少なくとも「文」という単位が連なって構成されているはずである。あるいは複数の文が集まったり、長い文は複数の部分に分かれているなど、といったことが考えられるはずである。そして実際に、叙事詩は全編にわたってかなり明確で長さがそろった数行単位の文章・句で構成されている。本稿ではこれらを「詩連」と呼ぶ。

平賀サタモ ([1959]1993) の冒頭部は、次のような詩連構造になっている³⁷。

³⁶ 金田一京助、久保寺逸彦らは定型表現の構造については指摘しているが、それ以外の部分の構造についてはほとんど言及していない。Philippi もやはり定型表現 (formula) の分類を試みているが、それ以外の部分がどのような単位で構成されるかについてはあまり明確に示していない。アイヌ叙事詩の定型表現とそれ以外の部分の関係については、モンゴル叙事詩に関する藤井麻湖 (1997) の研究が示唆的だと思われるが、別稿に譲りたい。

³⁷ 筆者の管見ではアイヌ口承文芸についてこのように数行ごとに区切る表記を初めて積極的に採用したのは Philippi ([1979]1982) である。ただし、Philippi はその区切りが何を意味するのか必ずしも明確には示していない。

例 15

- | | | |
|------|--------------------|-----------|
| 0001 | Iresu casi | 私が育てられた砦 |
| 0002 | tan poro casi | この大きな砦が |
| 0003 | cisireanu. | 建っていた。 |
| 0004 | Iresu sapo | 私の育ての姉が |
| 0005 | irespa ki wa | 私を養育して |
| 0006 | okaan katu | 暮らしていた様は |
| 0007 | anomommomo. | 省略する。 |
| 0008 | u Pakno ne kor | それはそれとして |
| 0009 | u casi kotor | 砦の天井が |
| 0010 | koyaykan ruwe | 飾られていたのは |
| 0011 | <u>ene oka hi,</u> | このようである。 |
| 0012 | Sikari cup noka | 満月の模様や |
| 0013 | u nin cup noka | 欠けたる月の模様が |
| 0014 | earuwato. | 満ち満ちている。 |
| 0015 | u Emko kusu | そのため |
| 0016 | u casi upstor | 砦の内側は |
| 0017 | u tonon sukus | 昼の光が |
| 0018 | cieomare | 入ってくる |
| 0019 | u semkoraci | かのように |
| 0020 | u casi upstor | 砦の内側は |
| 0021 | enipekooma. | 輝いていた |
| 0022 | u Pakno ne kor | そこまでとして |
| 0023 | kamuy iyoykir | 神の宝物 |
| 0024 | kamuy inuma | 神の武具が |
| 0025 | u ran pes kunne | 低い崖のように |
| 0026 | cisiturire | 伸びていた |
| 0027 | Iyoykir enka | 宝物の上に |
| 0028 | u nispa mut pe | 英雄の佩刀が |
| 0029 | otu santuka | 何本もの柄が |
| 0030 | uowkauyru. | 重なっていた。 |

0031	Ukopusakur-	たくさんの房が
0032	<u>u -suypa kane.</u>	揺れながら。
0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
0034	tapan pe rekor	名付けて
0035	kamuy hayokpe	神の鎧
0036	u siknu pito ne	生きている神のように
(*0037	siknu kamuy ne	(生ける靈として) ※この行は録音時にはない
0038	<u>u an kane</u>	ありながら。

これらの詩連は、基本的に文もしくは独立性の高い節と一致し「動詞が最後に後置される」というアイヌ語の語順に合わせて動詞で終わるか、動詞の後に終助詞もしくは強い区切りを示す **kane** などの接続詞が置かれている。

(1) 0003 **cisireanu**、0007 **anomommomo**、0014 **earuwato**、0021 **enipekoma**、0026 **cisiturire**、0030 **uowkauyru** はいずれも述部をなす動詞である。

(2) 0011 ene oka hi 「それは次のようにある」は文法的には形式名詞で終わっているが、以下に直接話法を導入するため強い区切りの機能がある³⁸。

(3) 0031 **Ukopusakur-** と 0032 u -suypa kane は「行またがり」の 1 語の動詞 **ukopusakursuypa** 「たくさんの房が揺れる」と接続詞 **kane** 「～しながら」、0038 u an kane 「ありながら」はともに接続詞 **kane** 「～しながら」で終わっている。叙事詩においては強 **kane** を含めいくつかの接続詞は多くの場合終助詞とほぼ同じ機能を有している³⁹。

接続詞 **kane** でつながれた 2 つの文は互いに独立性が高く、田村すゞ子・平賀サタモ(1933)でも、日本語訳においてしばしばそこで文を切っている。そのほかに **hike**、**awa**、**kusu**、**p/pe** なども強い区切りを示す。

3 – 3. 独立性の高い関係修飾節・4 行対句

主節と接続詞で導かれる従属節が 2 つの文とみなし得るだけでなく、長い関係修飾文に

³⁸ Philippi (1979 : 38) は **ene oka hi** で終わる数行単位を「直接話法に関する formula」と分類している。

³⁹ 叙事詩においてしばしば接続詞が文末詞のように用いられている。藤井麻湖 (1997 : 116) はモンゴル叙事詩について同じような現象を指摘している。

おいても修飾部と被修飾部の独立性は高い。それらは別々の詩連をなしている可能性がある。また、逆に短い文が2つで一つのまとまりになっている例もみられる。それらも詩連をなしている可能性がある。

3-3-1. 独立性の高い関係修飾節による詩連

. 長い関係文においては関係修飾節（連体修飾節）と被修飾節が別の詩連になる。

例 16

0879	u ki wa ne kor	そこで
0880	u nen ta usa	誰が
0881	u respa ciki	育てたら
0882	u pirka kuni	よいような
0883	kamuy opoysan	神の子孫
0884	kamuy hekaci	神の子供
0885	u ne nankora	であろうか

3-3-2. 4行からなる対句による詩連

2行が2組で4行対句となっている場合は、それだけで1つの詩連になる。

例 17

0657	Kamuy tamasay	神の首飾りを
0658	o rekutuyruke.	首にかけた。
0659	Kamuy ninkari	神の耳輪を
0660	kisar uyruke.	耳につけた。

3 – 4. 詩連構造があいまいな例

次に示すような 7 行詩連を例えば「*で示した位置で分割するのはおそらく適切ではないであろう。今後、このような位置で詩連を区切る要素が見つかるかもしれないが、今のところ区切りが明確なのは kane などの接続詞で明確に区切られている場合である。

例 18	0015	u Emko kusu	そのため
	0016	u casi upsor	砦の内側は
	0017	u tonon sukus	昼の光が
	0018	cieomare	入ってくる
		*	
	0019	u semkoraci	かのように
	0020	u casi upsor	砦の内側は
	0021	enipekoma.	輝いていた

また、次のような 6 行も、形式的（文法的）には 6 行で 1 文とみるか、3 行文と 2 行文とみるかあいまいである⁴⁰。意味の連続性からみれば、おそらく以下のように「*」で示した位置で分割すべきではない。

例 19	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
	0034	tapan pe rekor	名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧
		*	
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	0038	u an kane	ありながら。

⁴⁰ 形式的（文法的）には 0034 tapan pe rekor kamuy hayokpe の後に動詞 ne が必要である。ne が省略された破格とみることもできるし、0038 u an kane の an まで 1 文であるとみなすこともできる。

ただし、田村すゞ子・平賀サタモ（1993：13）では平賀サタモ本人が5行文の0036 u siknu pito ne「生きている神のように」の後ろに以下のように0037 siknu kamuy ne「行ける靈として」を追加するのが正しい、と修正を加えている。その場合は対称性からみても4行文と2行文と解釈すべきかもしれない。

例 20	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上に
	0034	tapan pe rekor	あるものは名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧
		*	
	*0037	siknu kamuy ne	生きている靈のように（この行は録音時にはない）
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	0038	u an kane	ありながら。

また、その場合には0027から0038までの12行が以下のように対称性を持った一連の表現として4詩連になっているとみるべきなのかもしれない。

例 21	0027	Iyoykir enka	宝物の上に
	0028	u nispa mut pe	英雄の佩刀が
	0029	otu santuka	何本もの柄が
	0030	uowkauyru.	重なっていた。
	0031	Ukopusakur-	たくさんの房が
	0032	<u>u -suypa kane.</u>	揺れながら。
	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
	0034	tapan pe rekor	名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧（があった）。
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	*0037	siknu kamuy ne	生きている靈のように（この行は録音時にはない）
	0038	<u>u an kane</u>	ありながら。

3 – 5. 1詩連の行数

平賀サタモ ([1959]1993) という叙事詩テキスト全体は、1~7行からなる詩連（文もしくは節）を単位として構成されている。詩連数は合計 310 詩連である。1行から 7行詩連までの各行数の詩連の出現比率は以下のようになっている。

表2. 平賀サタモ ([1959]1993) の各種詩連の数と割合

行数	詩連数	比率
1	2 (結句「pakno」を含む)	0.6 %
2	47	15.1 %
3	87	28.1 %
4	104	33.5 %
5	48	15.5 %
6	16	5.2 %
7	6	1.9 %
合計	310	99.9 %

3行詩連・4行詩連が6割強を占める。もっとも数が多いのは4行詩連である。4行単位の定型表現の存在を考え合わせると、この叙事詩文体には4行で1文となる強い志向があるといってよい。

4. 平賀サタモの1959年の語りにおける押韻出現数

4-1. 4行詩連における頭脚韻

平賀サタモ ([1959]1993) の冒頭部には以下のような「単語の繰り返し」と「音の一致」がみられる。

例 22	0001	Iresu casi	私が育てられた砦
	0002	tan poro casi	この大きな砦が
	0003	cisireanu.	建っていた。
	0004	Iresu sap o	私の育ての姉が
	0005	irespa ki wa	私を養育して
	0006	okaan katu	暮らしていた様は
	0007	anommom o .	省略する。
	0008	u Pakno ne kor	それはそれとして
	0009	u casi kot or	砦の天井が
	0010	koyaykan ruwe	飾られていたのは
	0011	ene oka hi,	このようである。
	0012	Sikari cup noka	満月の模様や
	0013	u nin cup noka	欠けたる月の模様が
	0014	earuwato.	満ち満ちている。

これらのうち、音のみの一致はいわゆる「押韻」の可能性がある。しかし、アイヌ語の母音数は5つであり、叙事詩の「詩連」内において行頭や行末で母音が一致しても、ほとんどは偶然の産物であろう。

結論を先に言えば、実際の行頭行末の母音押韻の数は、偶然生じる確率をわずかながら上回っている。つまり「偶然生じる母音押韻を生かすが、なるべく多く押韻せよ（ただし、押韻しない詩連があってもよい）」というルールだと考えられる。それがアイヌ語の叙事詩における母音韻である。これは Philippi ([1979]1982:29) の「義務的ではないが、意識的に用いられている」という説明と合致する。以下では詩連の行頭母音の押韻について、出現数の多い順に4行詩連・3行詩連・2行詩連については概略を、7行詩連・6行詩連については全例を検証する。行末母音についてはデータのみ示す。

4－1－1. 4行詩連（104連）における行頭母音韻出現数

4行詩連における行頭母音韻の種類は以下の5通りである。

- ① 「2行のみ」：4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音がそれぞれ別の母音
- ② 「2行2組」：4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音が別の母音で一致
- ③ 「3行のみ」：4行中3行で行頭が同じ母音
- ④ 「4行一致」：4行全ての行頭が同じ母音
- ⑤ 「4行全相違」：4行全ての行頭が違う母音

各母音が同じ確率で行頭に来るとき、これらの一致が偶然生じる可能性は以下である。

表3. 4行詩連の行頭で各種押韻が偶然生じる確率（各母音の出現比率が同じ場合）

押韻種別	確率 (%)
2行のみ	57.6
2行2組	9.6
3行のみ	12.8
4行一致	0.8
4行全相違（押韻なし）	19.2
合計	100

アイヌ語は5母音の言語であるため、並んだ4行において行頭・行末で母音が一致する確率は非常に高く、偶然に任せても8割を超える。したがって詩連内部における行頭の「押韻」の多くは自然に生じたものであろう。しかし、それに加えて意図的に押韻がなされてもいるとすれば、比率は偶然によるよりその分だけ高くなるはずである。

平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭母音押韻の数と比率は以下である。

表4. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連の行頭母音韻の数と比率

押韻種別	出現数	比率	偶然生じる確率
2 行のみ	56	53.8 %	57.6
2 行 2 組	11	10.6 %	9.6
3 行のみ	29	27.9 %	12.8
4 行全一致	3	2.9 %	0.8
4 行全相違 (押韻なし)	5	4.8 %	19.2
合計	104	100 %	100

実際には、行頭での出現数が多い母音と少ない母音がある。例えば母音 u は行頭での出現数が少ない（虚辞の u を除く）。平賀サタモ ([1959]1993) における各母音の数と比率は以下のようになっている⁴¹。

表5. 平賀サタモ ([1959]1993) 全 1151 行における母音出現率

母音	行頭	行末	最後から二番目	参考：全母音
a	404 (35.0%)	323 (28.1%)	448 (38.9%)	1841 (33.0%)
e	221 (19.2%)	307 (26.7%)	155 (13.5%)	1099 (19.7%)
i	261 (22.7%)	167 (14.5%)	128 (11.1%)	864 (15.5%)
o	178 (15.5%)	199 (17.2%)	223 (19.4%)	982 (17.6%)
u	87 (7.6%)	155 (13.5%)	197 (17.1%)	799 (14.3%)
合計	1151 (100%)	1151 (100%)	1151 (100%)	5585 (100.1%)

平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連 (586 行 104 詩連) における行頭母音の出現数も全 586 とほぼ同様で、a (136[32.7%])、e (81[19.5%])、i (102[24.5%])、o (69[16.6%])、u (28[6.7%]) である。それを考慮すると、全母音が同じ比率で出現する場合とは、押韻が偶然に生じる確率が変わる。実際の一致の出現数・比率は以下である。

⁴¹ 最後から 2 番目の音節は母音 a が 38.9% であり、最終音節より多めである。これは作為が全くなくとも「同じ音になりやすい」ということである。最終音節でなく、この位置（最後から 2 番目）の音節が叙事詩を歌う際にもっとも明瞭に歌われる個所であることは偶然ではないのかもしれない。

表5. 平賀サタモ ([1959]1993) 4行詩連 (586行 104詩連)において、各母音の出現比率を考慮した上で偶然による押韻の出現確率と実際の出現数

押韻種別	実際の出現数 (比率)	偶然生じる数 (確率)
2行のみ	56 (53.9%)	57.0 (54.9%)
3行のみ	29 (27.9%)	18.5 (17.9%)
2行2組	11 (10.6%)	12.1 (11.7%)
4行全一致	3 (2.9%)	1.8 (1.7%)
4行全相違 (押韻なし)	5 (4.8%)	14.4 (13.9%)

これらのうち「押韻しない」のは「4行全相違」の場合だけであり、偶然で14.4%生じるはずだが、実際には4.8%である。つまり、意図的でなくとも86.1%で押韻するはずだが、実際には95.2%で押韻している。もともと一致する可能性が高いとはいえ、わずかながら意図的な押韻もあると考えてよいだろう。

4-1-2. 繰り返し語を除外した場合の行頭母音出現数

ウポボなど叙景詩と長大な叙事詩では文体に違いがあり、前者にはかけ声など繰り返し語句が非常に多いのに対して、後者ではそれらは少ない。NHK (1965) のウポボ 159歌中で繰り返し語句を含まないものはわずか8歌である。ウポボに「押韻」はあるにせよ、その数字が「繰り返し語句」によって結果的に押し上げられているのも確かである⁴²。

叙事詩にも少ないにせよ「繰り返し語」が存在する。比率を検証する上では、「叙事詩においても繰り返し語が多いために一致率が高くなっているのであって、押韻ではないのではないか」という疑問が生じるであろう。結論を先にいえば、繰り返し語によって一致率が高くなっているわけではない。以下は検証である。

104詩連のうち17例では複数行の行頭に同一の単語・名詞形態素が置かれている。これらは「押韻」というよりも繰り返し語による一致である。例えば

- 例 24
- | | | |
|------|-----------------------|-----------|
| 0067 | Kaparpe itanki | 上等なお椀 |
| 0068 | kaparpe otcike | 上等なお膳を |
| 0069 | uwoeroski | 並べてくれた、 |
| 0070 | ikoypunpa | 私に供してくれた。 |

⁴² 「繰り返し語句」と「押韻」は、原理的には同じく「繰り返しの感覚をもたらす技法」である。人類史的には「押韻」はユーラシア大陸の一部で発達した特殊な技法なのである。世界的には「繰り返し語句」だけによる歌謡のほうが広く分布している。

において、kaparpe 「上等な」 という同じ単語が繰り返されている。また、

例 25	0539	Ikootuyma	遠くから私に対して
	0540	u sikkeruru	眼を見開き
	0541	u siktokoko	眼をむき出している
	0542	aruska kusu	私は腹を立てて ⁴³

において、**sikkerukeru** と **siktokoko** は同一の名詞形態素 **sik**「目」を繰り返し用いている。これら、一部が異なるほぼ同じ語句を用いる修辞は押韻と非常に似た現象であるが、厳密にいえば押韻ではない。これらは「同じ意味であるからこそ対句になっている」のであり、意味と音形のどちらが重要なのか不明である⁴⁴。しかし、アイヌ語は单音節語基を多数つなげて 1 単語とする総合的な言語であり、その結果出来上がる単語において内部の語基の意味が本来とはかけ離れてしまっていることが多い⁴⁵。本稿では便宜的に「独立語としても用いられる語基を語頭に含んでいるか否か」を基準として、その一致は押韻ではなく繰り返し語として扱う。o-re A/o-tu A、という対句や、iresu「育てる（单数形）」と irespa「育てる（複数形）」など語頭が同じ单複交替形などの一致は「繰り返し語句」であり、a-などの人称接辞や自動詞化接頭辞 i-、ko-、e-など充当接頭辞、 名詞的であっても独立した名詞形を持たない si-、yay-、mon-などの一致は「押韻」として扱う。

⁴³ この詩連は次の詩連との境界があいまいである。ikootuyma（副詞）、sikkeruru（動詞）、siktokoko（動詞）の 3 行で文が終わっており、最終行 aruska kusu「私は腹を立てて」を次の詩連の冒頭行とみなすこともできる。しかし、意味的には sikkeruru と aruska kusu の間は強く結びついており形式的に混乱している。sikkeruru/siktokoko という対句形式をとったために、その後ろに aruska kusu に形式的につながる形態素を置きづらくなってしまっている（本来の文としては sikkeruru hi aeruska kusu などが考えられる）。

⁴⁴ これについては今後の課題としたい。

⁴⁵ 例えば irankarapte 「ご挨拶申し上げます」がどのような語基からなっているかなどは、すでに分からなくなっている。

押韻は「行頭における一致」のうち「繰り返し語による一致」を除いたものである。そのような一致を含む詩連は 87 例ある。その内訳を示すと以下のようになる。

表7. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連の押韻（繰り返し語句による一致を除く）

押韻種別	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2 行のみ	47 (54.0%)	47.1 (54.1%)
3 行のみ	24 (27.6%)	16.3 (18.7%)
2 行 2 組	8 (9.2%)	11.8 (11.7%)
4 行全一致	3 (3.4%)	1.7 (2.0%)
4 行全相違（押韻なし）	5 (5.7%)	11.7 (13.4%)
合計	87 (99.9%)	88.6 (99.9%)

意図的でなくとも 86.5%で押韻するはずだが、実際には 94.2%で押韻している。つまり、繰り返しによらなくても、やはり高めのポイントになっている。

4 – 1 – 3. 4 行詩連における行頭子音韻出現数

叙事詩における「行頭子音韻」は出現に偏りが大きく、偶然か作為かを考えるのは困難である。平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連 586 行のうち行頭子音が声門閉鎖音である（いわゆる母音始まりである）行が 201 行 (34.3%) と約 3 分の 1 である⁴⁶。行頭子音韻を踏む 4 行詩連は 30 例（4 行詩連全体の約 29%）ある。行頭子音韻の出現比率は偶然生じる確率と比して大きく異なることはないが、「3 行のみ一致」している例が多めに生じている。偶然 2 行のみ一致しているものを工夫したのかもしれない。

表8. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭子音一致の出現数

押韻種別	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2 行のみ	23 (22.1%)	27.3 (26.9%)
2 行 2 組	0 (0%)	0.4 (0.4%)
3 行のみ	7 (6.7%)	2.5 (2.4%)
4 行全一致	0 (0%)	0.1 (0.1%)
4 行全相違（押韻なし）	74 (71.2%)	73.1 (70.3%)
合計	104	103.4 (100.1%)

⁴⁶ ただし、アイヌ伝統歌謡においては 4 行すべてが声門閉鎖音始まり（母音始まり）の歌がいくつか存在する。丹菊逸治（2018）

なお、全 1151 行中、母音始まり（声門閉鎖音始まり）の行は 504 (43.8%)、子音始まりの行は 647 (56.2%) であり、ほぼ半数だが子音始まり行が若干多い（4 行詩連 104 連 416 行中ではそれぞれ 201 (48.3%) と 215 (51.7%) であり比率はほぼ同じだが、やはりほんのわずか子音始まり行のほうが多い）。以下に子音の内訳とともに示す。

表9. 平賀サタモ ([1959]1993) 全 1151 行および 4 行詩連 416 行における行頭音数と比率

	全行 (数)	全行 (比率)	4 行詩連 (数)	4 行詩連 (比率)
p	44	3.8 %	9	2.2 %
t	70	6.1 %	24	5.8 %
k	205	17.8 %	76	18.3 %
h	39	3.4 %	12	2.9 %
m	34	3.0 %	7	1.7 %
n	67	5.8 %	25	6.0 %
r	30	2.6 %	11	2.6 %
s	84	7.3 %	33	7.9 %
c	46	4.0 %	12	2.9 %
w	3	0.3 %	0	0.0 %
y	25	2.2 %	6	1.4 %
母音 (声門閉鎖音)	504	43.8 %	201	48.3 %
子音	647	56.2 %	215	51.7 %
合計	1151	100 %	416	100 %

4-1-4. 行頭母音韻・繰り返し語句を持たない4行詩連

平賀サタモ ([1959]1993) の4行詩連104例において、行頭母音韻（繰り返し語句によるものを含む）の出現率は99例 95.2%、行頭子音韻を含めると行頭韻出現率は、103例 99.0%、行頭に押韻・繰り返し語句を全く持たない4行詩連はわずか1例 1%にすぎない。

NHK (1965) に収録された159歌のウポポにおいては、行頭押韻母音韻（繰り返し語句によるものを含む）の出現率は153歌 96.2%、行頭母音が関わる不完全韻などを含めると156歌 98.1%が押韻している。つまり、ウポポにおいても叙事詩の4行詩連においても、押韻の出現率は偶然によるよりも高くなっている。

行頭の母音が全て異なる4行詩連は以下の5例である。

資料1	0079	<u>u</u> Sirka nuye	ナイフの鞘の彫刻
	0080	<u>t</u> omika nuye	刀の鞘の彫刻
	0081	<u>t</u> apan pe patek	そればかりを
	0082	nepki ne aki	私は仕事としていた。

資料2	0341	<u>u</u> Ki rok awa	そして
	0342	<u>k</u> unne kosonte	黒いコソンテの
	0343	<u>k</u> amuy menoko	神の女性は
	0344	ene itak hi,	次のように言ったのだ。

資料3	0739	<u>u</u> Si nis kotor	天空面を
	0740	<u>u</u> toni un wa	あちらへ
	0741	<u>u</u> tani un wa	こちらへ
	0742	<u>e</u> sisuye kor	揺れるように行き

資料4	1027	Ne hi koraci	それと同時に
	1028	<u>ru</u> an toy ka wa	神なる地表から
	1029	<u>t</u> apan kamuy maw	この神の風が
	1030	cirikipuni	吹き上がった。

資料5	1107	<u>P</u> oro ketusi	大きなケトウシ
	1108	<u>u</u> s ut ketusi	先祖伝来のケトウシを
	1109	s e kane oka	背負った者たちが
	1110	ahup wa arki	入って来た。

上記のうち4例(80%)は行頭子音韻を踏んでいる。行頭子音韻を踏む4行詩連は104詩

連中 30 例（4 行詩連全体の約 29%）だから、サンプル数は非常に少ないものの、高い比率とはいえよう。つまり「行頭母音韻を持たない 4 行詩連には、行頭子音韻の出現率が高い」のである。

なお、行頭押韻のない唯一の 4 行詩連 (1027-1030) を含め、上記 5 例は全て後述する「不完全韻」を踏んでいる。「不完全韻」の出現率は高く、全 310 詩連中 264 詩連 (85.1%)、全 1151 行中 711 行 (61.8%) が不完全韻を踏む行を含んでいる。叙事詩文体を特徴づけるものといってよい。

4 – 2. 3行詩連（87例）における頭韻の出現数

3行詩連は87例ある。うち行頭に繰り返し語句を持たない詩連は78例である。3行詩連における行頭母音韻の種類は以下の3通りである。

- ① 「2行のみ」：3行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音がそれぞれ別の母音
- ② 「3行全一致」：3行全ての行頭が同じ母音
- ③ 「3行全相違」：3行全ての行頭が違う母音

各母音が同じ確率で行頭に来るとき、これらの一致が偶然生じる確率は以下である

表 11. 3行詩連（87例）で押韻が偶然生じる確率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	偶然生じる確率
2行のみ	41.76 (48%)
3行全一致	3.48 (4%)
3行全相違（押韻なし）	41.76 (48%)

表 12. 3行詩連（87例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音出現比率を加味した修正後）

押韻種別	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2行のみ	53 (60.9%)	44.5 (51.2%)
3行全一致	6 (6.9%)	5.5 (6.3%)
3行全相違（押韻なし）	28 (32.2%)	37.0 (42.5%)
	87 (100%)	87 (100%)

全87詩連 261行

表 13. 繰り返し語によらない3行詩連78例において、押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音出現比率を加味した修正後）

組み合わせ	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2行のみ一致	45 (57.7%)	40.0 (51.2%)
3行全一致	5 (6.4%)	4.7 (6.1%)
3行全相違（押韻なし）	28 (35.9%)	33.3 (42.7%)
	78 (100%)	78 (100%)

意図的でなくとも57.3%で押韻するはずだが、実際には64.1%で押韻している。4行詩連と同様、やはり繰り返しによらなくても、実際の出現比率はやや高めになっている。

なお、3行詩連においては4行詩連と異なり、行頭母音韻を踏まない28例における子音

の一致の比率が特に高いということはないようである。

4-3. 5行詩連（48例）における頭脚韻

4-3-1. 5行詩連における行頭母音韻出現数

5行詩連は48例ある。うち行頭に繰り返し語句をもたない詩連は35例である。5行詩連における行頭母音韻の種類は以下の7通りである。

- ①「2行のみ」：5行中2行の行頭が同じ母音、残り3行の行頭母音がそれぞれ別の母音
- ②「2行2組」：5行中2行の行頭が同じ母音、残り3行中2行が別の母音で一致
- ③「3行のみ」：5行中3行の行頭が同じ母音、残り2行の行頭母音がそれぞれ別の母音
- ④「3行と2行」：5行中3行の行頭が同じ母音、残り2行が別の母音で一致
- ⑤「4行のみ」：5行中4行の行頭が同じ母音、残り1行が別の母音
- ⑥「5行全一致」：5行全ての行頭が同じ母音
- ⑦「5行全相違」：5行全ての行頭が違う母音

表14. 5行詩連（48例）で押韻が偶然生じる確率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	偶然生じる確率
2行のみ	18.4 (38.4%)
2行2組	13.8 (28.8%)
3行のみ	9.2 (19.2%)
3行と2行	3.1 (6.4%)
4行のみ	1.5 (3.2%)
5行全一致	0.1 (0.16%)
5行全相違（押韻なし）	1.8 (3.84%)

表15. 5行詩連48例において押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2行のみ	11 (22.9%)	13.0 (27.2%)
2行2組	13 (27.1%)	13.2 (27.5%)
3行のみ	8 (16.7%)	11.5 (24.0%)
3行と2行	4 (8.3%)	4.9 (10.3%)
4行のみ	12 (25.0%)	3.9 (8.2%)
5行全一致	0 (0%)	0.4 (0.9%)
5行全相違（押韻なし）	0 (0%)	0.9 (1.9%)
	48	47.8

表 16. 繰り返し語によらない 5 行詩連 35 例において押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2 行のみ	6 (17.1%)	7.9 (22.6%)
2 行 2 組	13 (37.1%)	9.8 (27.9%)
3 行のみ	4 (11.4%)	8.8 (25.1%)
3 行と 2 行	4 (11.4%)	4.2 (12.0%)
4 行のみ	8 (22.9%)	3.5 (10.0%)
5 行全一致	0 (0%)	0.4 (1.3%)
5 行全相違（押韻なし）	0 (0%)	0.4 (1.1%)
	35	

5 行詩連においては全行の母音が異なっている例はない。だが、アイヌ語は 5 母音なので、5 行詩連で「押韻しない」のは全行の母音が互いに異なる場合のみであり、偶然生じる確率は 0.7%である。つまり 99.3% の確率で少なくとも 2 行で母音が一致する。したがって「2 行以上の押韻」数からは何が意図されているのかは判断できない⁴⁷。

押韻種別内訳をみると、実際の数では、2 行のみの押韻が減り、2 行 2 組でそれぞれ押韻、4 行で押韻の割合が増えている。だが、3 行一致、3 行と 2 行で一致している押韻は逆に若干減っている。

4 – 3 – 2. 5 行詩連における行頭子音韻

5 行詩連全 48 詩連のうち行頭子音韻を持つ詩連は 19 詩連、39.6%である。

5 行詩連全 48 詩連 240 行中、母音始まりの行が 85 行 (35.4%)、子音始まりの行は 155 行 (64.6%) である。平賀サタモ ([1959]1993) 全体での母音始まり行と子音始まり行の比率 (43.8 : 51.7) に比べて、子音始まり行の比率が若干高くなっている。

表 17. 平賀サタモ ([1959]1993) における母音始まり行と子音始まり行の数

	全 1151 行	4 行詩連 416 行	5 行詩連 240 行
母音始まり行 (声門閉鎖音)	504 (43.8%)	201 (48.3%)	85 (35.4%)
子音始まり行	647 (56.2%)	215 (51.7%)	155 (64.6%)

⁴⁷ 5 母音言語において、99.3% の確率で生じる「5 行中 2 行の行頭のみで母音が一致する状態」を「繰り返しの感覚」としてとらえ得るのであれば、「5 行を 1 単位とする」というルールによる「自動的な押韻」ということになる。

4-4. 2行詩連における行頭母音韻・行頭子音韻出現数

2行詩連は47例ある。うち行頭に繰り返し語句を持たない詩連は45例である。2行詩連では行頭母音韻は「2行一致（押韻している）か、2行不一致（押韻していない）か」の2通りしかない。押韻しているもの12例、押韻していないもの33例である。行頭子音韻を持つ2行詩連は1例のみである。

表18. 2行詩連(47例)で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率(母音が全て同じ比率の場合)

押韻種別	実際の出現数(比率)	押韻が偶然生じる確率
2行一致	14(29.8%)	9.4(20%)
2行不一致	33(70.2%)	37.6(80%)
合計	47(100%)	

表19. 2行詩連(47例)で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率(母音の比率を加味して修正)

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	14(29.8%)	11.1(23.7%)
2行不一致	33(70.2%)	35.9(76.3%)
合計	47(100%)	

表19. 2行詩連(行頭に繰り返し語句を持たない45例)で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率(母音が全て同じ比率の場合)

押韻種別	実際の出現数(比率)	押韻が偶然生じる確率
2行一致	12(26.7%)	9.0(20%)
2行不一致	33(73.3%)	36.0(80%)
合計	45(100%)	

表20. 2行詩連(行頭に繰り返し語句を持たない45例)で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率(母音の比率を加味して修正)

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	12(26.7%)	10.4(23.1%)
2行不一致	33(73.3%)	34.6(76.9%)
合計	45(100%)	

いずれにせよ、実際の出現数は偶然に生じるよりわずかながら高めである。

4 - 5. 6行詩連の構造

4 - 5 - 1. 6行詩連の行頭母音韻出現数

6行詩連は16例である。6行内部での行頭母音の一致の形式から見た場合、内訳は次のようになっている。

表22. 6行詩連16例の、押韻種別ごとの詩連出現数

押韻種別	詩連数
2行一致が2組	2
2行一致が3組	1
3行のみ一致	3
3行と2行それぞれ一致	5
3行一致が2組	0
4行のみ一致	3
4行と2行それぞれ一致	0
5行一致	2
6行一致	0

行数の多さと例の少なさを考えると、これらの「押韻」が偶然によるものか否かを判別することは難しい。そもそも第1行と第6行のように離れた位置で母音が一致していても一致だと感じられるのかどうか疑問である。

6行詩連が詩形式として不安定であることは内部構造からもうかがえる。16例中9例は5行詩連に1行追加された構成となっており、5行詩連部分だけでも押韻している。6例は内部に対句・言い換えなどによる2~4行の定型表現を含んでおり、それ以外の部分だけでも押韻している（ただし定型表現も押韻に参加してはいる）。つまり、16例中15例は3行~5行詩連の拡張とみなしうる。そして元の3~5行詩連として押韻がある。純粋な6行詩連は1例のみである。

以下に16例の構成を示しておく。

4－5－2. 繰り返し行による「5行詩連+1行」構成

同じ行が繰り返されて5行詩連が6行詩連になっているものが2例ある。

資料6	0097	Tane ne kusu	今では
	0098	sineanto ta	ある日
	0099	u nisapramta	突然に
	0100	u nisapramta	突然に（前行の繰り返し行）
	0101	ekimne rus <u>uy</u>	山に行きたい
	0102	iyannukam u	という気持ちでいっぱいになった。

資料7	0593	cipiyeckore	(彼女らが) 悪口を言ったのも
	0594	cipiyeckore	悪口を言ったのも（前行の繰り返し行）
	0595	u yupke hike	たいそうひどい悪口を
	0596	iyekarkar haw e	私に対して言ったこと
	0597	oka ya sekor	であろうか、と
	0598	yaynuan hike	思ったので

この2例について、田村すゞ子・平賀サタモ（1993：50）では平賀サタモ本人による「すぐ続けて次のことを言うとふしに入れないから、おなじことを二度いうことある」という説明を紹介し、「ふしを合わせるために前の行がくり返されている」としている。ただ、それだけでは詩形によるのか、それとも歌っているときの音の高低パターン（いわゆる「旋律」）の間違いを補完するためなのか判別できない。とはいえ、詩形としては1行だけで問題ないので、詩形式としては5行詩連と考えてよいであろう⁴⁸。

繰り返し行を除いた構成は1例目がtane ne kusu「今では」という導入部に続く4行。4行内部に行頭母音韻、行末母音韻がある。なお、行末母音韻は導入行を含む。

2例目は最終行がyaynuan hike「(と) 思ったので」という話法の行である。これはy行による頭子音韻をなす。それ以外の4行内部に行頭母音韻、行末母音韻がある。

⁴⁸ 朗唱時の単位の問題については今後の課題としたい。

4－5－3. 省略宣言句による「5行詩連+1行」構成

描写の省略宣言句 anomommomo「(以下)省略する」が付加されているものが1例ある。

資料8

0167	Tanepo sonno	今こそ本当に
0168	kamuy kar casi	神が作った砦
0169	keray ne kusu	であるがゆえに
0170	u casi kamuy	神のような砦の
0171	u pirka katu	美しいさまは
0172	anomommomo	省略する。(省略の宣言句)

anomommomo「省略する」はさまざまな挿入の仕方があるが、ここでは u pirka katu「その美しいさまは」に続いて文の一部となっている。第1行 tanepo sonno「今こそ本当に」は強調の導入行である。本来は「今こそ～であることを見たのであった」などと結び、さらに「その美しいさまは云々」と続くべきであるが、それらの部分が anomommomo「省略する」になっている。導入行と省略宣言行を除いた4行の内部には行頭母音韻、行頭子音韻、行末母音韻がある。ただし、行頭においては6行中4行の行頭母音が a でそろっている。

4－5－4. 場面転換句による「5行詩連+1行」構成

場面転換句 u pakno ne kor「それはそれとして」を第1行とするものが1例ある。

資料9

0567	u Pakno ne kor	それはそれとして (場面転換句)
0568	harkiso peka	左座側のあたりの
0569	u casi teksam	砦のそばの
0570	u niste toy or	固い土のところを
0571	hapur toy kunne	柔らかい土のように
0572	aureekiru	私は足でひっくり返した、

u pakno ne kor「それはそれとして」は明確な場面転換の語句である。したがって、前の詩連にも後ろの詩連にも特別な結びつきがない。これを除いた5行には行頭で「4行一致」の母音韻、行末では「2行一致」の母音韻がみられる（ただし5行あれば96%以上の確率で母音2つ以上が一致する）。

4－5－5. 感嘆句による「5行詩連+1行」構成

感嘆句 easirana 「何とまあ」を第 1 行とするものが 2 例ある。

資料 10 0268 **Easirana** 何とまあ（感嘆句）

0269 **kamuy** ne kusu 神であるがゆえ

0270 u **kamuy** ipor 神の顔つきの

0271 u **eypottumma** その顔つきからして

0272 **kosinna kane** （人間とは）違っていて

0273 nupur pe sone**e** 巫力ある者に違いない。

easirana 「何とまあ」に続く 5 行中、第 2・3・4・5 行は 4 行全体が定型表現である（ただし散文体であれば第 3 行 u kamuy ipor 「神の顔つきの」は不要）。この 4 行は内部に行頭子音韻を含む。母音の一致は 6 行に分散しており、4 行内部にまとまった母音韻はみられないが、繰り返し語句 kamuy がある。

資料 11 0637 **Easirana** 何とまあ（感嘆句）

0638 **sikari cup nok**a**** 満月の模様

0639 u **nin** cup nok**a** 三日月の模様

0640 **earuwato** がたくさんついている

0641 **kamuy kosonte** 神のコソンテが

0642 u **sanasanke** 出てきた。

easirana 「何とまあ」に続く 5 行中、第 2・3・4 行が 2 行対句を含む定型的表現（連体修飾句）である。その 2 行対句は行頭母音韻を踏む。また、第 5・6 行は行頭行末ともに母音韻を踏む。ただし、導入行 easirana 「何とまあ」は続く 3 行と母音韻を構成してもいる。

4－5－6. 間接話法句による「5行詩連+1行」構成

間接話法を導く句 yaynuan hike 「と、思ったが」あるいは yaynuan korka 「と、思ったのだが」が最終行になるものが3例ある。

資料 12	0439	Itak ne yakka	言葉さえも
	0440	ciyekosom•o-	私に対する
	0441	u -yaykatanu	無礼千万な表現を
	0442	iyekarkar haw•e	私に対して使う
	0443	oka ya sek•or	ものかと
	0444	yaynuan hike	私は思ったので（間接話法句）

資料 13	1143	T•apan te wan•o	これからは
	1144	mosir erekor	国によって名を呼ばれるのだ
	1145	u aynu sek•or	人間と
	1146	aireko oasi	呼ばれることになる
	1147	u ki haw•e an	のだなど
	1148	yaynuan hike	私は考えて（間接話法句）

資料 14	0447	Eun ka tapn•e	そのことに対し
	0448	u wen menok•o	悪い女性
	0449	utar orkehe	たちに
	0450	eattam neno	刀ひとつに
	0451	atuyapa anki	切ってやろう
	0452	yaynuan korka	と私は思ったが（間接話法句）

3例ではいずれも母音韻は前半部に偏っている。平賀サタモ（[1959]1993）全体では、yaynuan 「と、思う」を含む行が最終行になっている詩連は8例ある。うち2行詩連・3行詩連が各1例、5行詩連が2例、6行詩連が4例である。最も多い4行詩連の例はない。つまり、yaynu 「思う」を含む行は本来は詩連に含まれず、まとまった叙述内容を持つ詩連を作った後で、yaynu 「思う」を含む追加行で間接話法化しているのであろう。

4 – 5 – 7. 対句を含む構成

対句や言い換えなどによる定型的な表現は2行～7行詩連のいずれにもみられるが、6行詩連では16例中6例と高い比率で含まれている。対句的な定型表現はうち3例である。

資料 15	0215 Aratuyo so ka	はるか海原の上
	0216 atuyo so ka wa	海原の上から
	0217 mak an kat kor pe	どんな姿のものか
	0218 u ek hum konna	やってくる音が
	0219 koturimimse	鳴り響いている。
	0220 kokewrototke	轟いている。

資料 16	0221 u Senram sekor	さてさて（？）
	0222 mak an kat kor pe	どんな姿のものか
	0223 u pase humi	重い音
	0224 e siturare	を伴っている。
	0225 u Kosne humi	軽い音
	0226 e sihopire	を後にしている。

資料 17	0363 Tanan to or ta	今日は
	0364 Kotan sitcire	村を焼き
	0365 Mosir sitcire	国を焼く
	0366 San ka tososo	棚の上を荒らす
	0367 Oypepi poro	そのお椀が大きな
	0368 Kamuy ne an kur	神であるお方

資料15では、0219 **koturimimse** 「鳴り響く」 0220 **kokewrototke** 「轟く」は音や構成が類似し、語義が似ており、しばしばこの2つの対で用いられる決まり文句である。資料16では、0223～0226は **pase** 「重い」と **kosne** 「軽い」という紋切型の対義語を用いた表現である。資料27では、0364～0368は全体も英雄 Aynurakkur アイヌラックルの父親の描写として定型的な表現だが、内部に **kotan** 「村」と **mosir** 「国」という紋切型の類義語を用いてもいる。

4 – 5 – 8. 言い換えを含む構成

定型的な言い換えを含む構成である。

資料 18	0623	Tapan kamuy maw	神の風
	0624	ketusi upsor wa	ケトゥシの中から
	0625	hopuni kamuy maw	吹き出す神の風
	0626	kamuy maw sika	その神の風の上に乗り
	0627	kamuy kosonte	神のコソンテが
	0628	u puspa kane	出てきて

資料 19	0963	Nisatta wano	明日からは
	0964	tapan te wano	今からは
	0965	kamuy mosir ka un	神の世界へ
	0966	u kanto or un	天界へ
	0967	u arpa kuni p	行くべきもので
	0968	ane ruwe ne	私はあります。

資料 20	1082	Anak ki korka	けれども
	1083	hunakke kusu	せっかく
	1084	iresu sapo	私の育ての姉
	1085	kamuy moyremat	神の淑女が
	1086	cikaspaotte	私に命じた
	1087	iyekarkar pe	こと

資料 18 では、0624-0625 ketusi upsor wa hopuni **kamuy maw** 「ケトゥシ（容器）の中から吹き出す神の風」は直前の 0623 tapan **kamuy maw** 「この神の風」を説明する形になっている。散文的表現であれば 0623 自体が丸ごと不要である。資料 19 では 0965 の kamuy mosir ka 「神の世界」と 0966 の「天の世界」は同義の言い換えである。資料 20 では iresu sapo 「私の育ての姉」が kamuy moyremat 「神の淑女」という敬称で言い換えられている。これらの定型句は韻文であることを示す。また、押韻に参加しつつも、それなしでも押韻はなされている。これらの定型句は押韻形式的には 1 行とみなせるのではないか。

4－5－9. ただ長いだけの構成

資料 21	1118	Sekor eyki yakne	このようにお前がすれば
	1119	mosir erekor	国によって名付けられる
	1120	eki katuhu	ことにお前もなり
	1121	u aynu mosir	人間の国と
	1122	sekor erekor	呼ばれる
	1123	u ki kus ne na	ようになるだろう。

導入句や感嘆句などの独立した行をもたず、また明確な切れ目や結びつきの強い定型表現などを含まず、たんに長いだけの構成である。このような構成の 6 行詩連はこの 1 例だけである。とはいっても、内部に切れ目は存在する。

まず、第 1 行は条件節、最終行（第 6 行）はモード（法）を示す助動詞句であり、第 2～4 行で結びつきの強い 1 つの節をなしてはいる。つまり、Mosir erekor eki katuhu aynu mosir sekor erekor「国によって名付けられることにお前もなり、(この国も)人間の国と呼ばれる」の前後を Sekor eyki yakne 「このようにお前がすれば」と ki kus ne na 「そうなるであろう」で挟む構造になっている。また、第 2・3 行 mosir erekor eki katuhu 「国によって名付けられることにお前もなり」は、第 4・5 行 u aynu mosir sekor erekor 「人間の国と呼ばれる」の理由を示している。1 文で 1 詩連をなすという原則がある以上、統語論的な内部構造を持つのは当然ではあり、この 6 行詩連も例外ではない。しかし、他の 6 行詩連のようなはっきりとした「5 行詩連 + 1」という構成ではないように思われる。

4 – 6. 7行詩連の構造

7行詩連は6例ある。7行詩連は6行詩連以上に押韻の単位となることが難しいと思われる。6行詩連と同様に2~4行単位の定型表現を含むことが多く、実質的には2つの部分から構成されている。6例はそれぞれ導入行を持ち、さらに

- ① 資料22：比喩によって同じ内容を繰り返す2つの部分から構成されている
- ② 資料23：同じような美辞を含む2つの部分から構成されている
- ③ 資料24：定型表現を含む
- ④ 資料25：詳細な説明による言い換えを含む
- ⑤ 資料26：関係文と定型表現を含む
- ⑥ 資料27：関係文を含む

というさまざまな構成法で作られているが、基本的には前半部・後半部の各部分内部で押韻している。ただし、資料24は後半、資料26は前半のみで押韻している。

4-6-1. 7行詩連（その1／6）：比喩による繰り返しを含む構成

比喩導入句 u semkoraci 「かのように」によって実質的に同じ内容が繰り返される構成。

資料 22	0015	u Emko kusu	それによって（導入行）
	0016	u casi upsor	砦の内側
	0017	u tonon sukus	昼の光
	0018	cieomare	入ってくる
	0019	u semkoraci	かのように
	0020	u casi upsor	砦の内側
	0021	enipekooma	光線が差し込む。

u emko kusu 「それによって」という比喩の導入行があり、3行ずつのまとまりが2つ並んでいる。まとまりごとに行頭母音韻を踏んでいる。u semkoraci 「かのように」は比喩を導入する句だが、ここでは実質的には同じ内容 (tonon sukus cieomare「昼の光が入ってくる」と casi upsor enipekooma 「砦の内側に光線が差し込む」) が繰り返されている。

4-6-2. 7行詩連（その2／6）：美辞の繰り返しを含む構成

感嘆句に導入され、美辞を繰り返している構成。

資料 23	0043	Easirana	何とまあ（感嘆句）
	0044	u nan nipeki	顔から発せられる光は
	0045	<u>hetuku cup ne</u>	昇る太陽のように
	0046	<u>iyenu cupki</u>	発する太陽の光が
	0047	u <u>ciwre kotom</u>	差し込むかのように
	0048	u <u>pirka ruwe</u>	美しいことに
	0049	anikorayap	私は感嘆する。

感嘆句 easirana 「何とまあ」を含む前半3行と後半4行で構成される。前半3行、後半4行には行頭母音韻がみられる。主人公が育ての姉の美貌を褒め称える美辞は二重になっていて、0045 hetuku cup ne 「昇る太陽のように」という比喩が、0046-0047 iyenu cupki ciwre kotom 「発する太陽の光が差し込むかのように」と言い換えて繰り返されている。繰り返された部分は 0048 pirka ruwe 「(のように) 美しいこと」との3行で行頭韻を踏む

4－6－3. 7行詩連（その3／6）：長い定型的表現を含む構成

感嘆句に導入され、定型的な修飾表現を持つ構成。

資料 24	291	Easirana	何とまあ
	292	<u>inan okay pe</u>	どちらが
	293	u <u>rapokkari</u>	劣る
	294	u <u>ki kane hi</u>	ということも
	295	u <u>koysamnopo</u>	ないような
	296	upak ramet <u>ok</u>	同じくらいの勇者
	297	ciesonere	に間違いない。

感嘆句 easirana 「何とまあ」とそれに続く 6 行詩連からなる。6 行詩連は inan okay pe rapokkari (ki kane hi) koysam 「どちらが劣ることもない」という 4 行にわたる定型的な修飾表現を含む。この表現を利用した 4 行は行頭母音韻を含み、行末でも韻を踏む。最後の 2 行からなる後半部は内部で押韻せず、前半部から連続した押韻になっている。

4－6－4. 7行詩連（その4／6）：言い換えを含む構成

言い換え（説明の詳細化）を内部に持つ構成。

資料 25	0316	u Ki rok ayne	そうしているとやがて
	0317	u <u>tan tepo ta</u>	すぐ目の前に
	0318	<u>retar kosonte</u>	白いコソンテの
	0319	<u>ksamuy menoko</u>	神の女性の
	0320	u <u>teksama ta</u>	すぐそばに
	0321	mak an kat kor <u>pe</u>	どんな姿のものだろうか
	0322	cisikurure	近寄ってきた。

導入句 u ki rok ayne 「そうしているとやがて」に、場所を説明する 4 行、動作を説明する 3 行という構成になっている。場所を説明する 4 行は u tan tepo ta 「すぐ目の前に」と言ってから、その場所をさらに詳細に述べる 3 行が続く構成である。最初の 4 行は内部に押韻を含む。最後の 2 行も行末で母音韻を踏む。だが、第 6 行目つまり後半部の冒頭は前半部からの連続した押韻になってしまっている。

4 – 6 – 5. 7行詩連（その5／6）：関係文と定型表現を含む構成

関係文と定型表現を含む構成。

資料 26	0560	u Ekan ayne	ついに来て（場面転換）
	0561	<u>iresu</u> casi	私の育った砦の
	0562	casi erupsik ta	砦の奥側で
	0563	u tan rikna wa	その高いところから
	0564	u simomanpe	大きなシカを
	0565	aosura <u>hum</u> ko	放り出した音が
	0566	<u>korimnatar</u> a	鳴り響いた ■

導入句 u ekan ayne 「ついに来て」は ek 「来る」という具体的な動詞を含むが、その前の詩連で移動しているさまが語られているので、やはり u ki rok ayne 「そうしたあげく」などの代動詞を含む導入句と同じように、ほぼ接続詞句と同じようなものとみるべきであろう。iresu casi / casi erupsik ta 「私が育った砦の／砦の奥側で」は叙事詩的な関係文であり、散文（日常会話文体）であれば、たんに iresu casi erupsik ta 「私が育った砦の奥側で」といえばすむ。最後の 2 行は hum「音」について korimnatar a 「鳴り響く」という定型的表現である。導入句の次の前半 4 行が押韻を含む。前半には叙事詩的関係文、後半はに定型表現と行頭行末がある。だが、前半部と後半部の間でも母音 a による押韻が連続している。

4 – 6 – 6. 7行詩連（その6／6）：長い関係節を含む構成

長い関係修飾を含む構成

資料 27	0828	<u>Cikuni</u> kupka	木の鍬（くわ）を
	0829	<u>ani</u> mosir kar	国土を作るのに使った
	0830	<u>u ki</u> rok kupka	その鍬を
	0831	<u>m</u> osir noski wa	国土の真ん中から
	0832	u oyra hine	忘れたまま
	0833	kamuy nis ka un	神の天空に
	0834	rikin aan pe	上ってしまったのですが

導入句などはないが、前半 3 行が関係修飾を含む名詞句になっている。この部分は冗長的な表現になっている。すなわち、散文体ならたんに ani mosir kar/cikuni kupka 「国土を作っ

た木の鍬」でせいぜい 2 行ですむものを、cikuni kupka/ani mosir kar/u kirok kupka 「木の鍬、国土を作った、そうした鍬」と 3 行に伸ばしている。その 3 行は行頭母音韻、行末母音韻をともに含む。2 行のままだと行頭母音韻を踏まない。後半 4 行は前半 mosir noski wa/u oyra hine 「国土の真ん中から／（鍬を）忘れたまま」と後半 kamuy nis ka un/rikin aan pe 「神の天空に／上ってしまったのですが」に分かれる。接続詞 hine があるが、意味の結びつきが強いのでこれは同一の詩連とみるべきであろう。この 4 行の内部では行頭母音韻、行末母音韻が踏まれる。なお、前半部と後半部の境目にあたる第 3 行と第 4 行をまたいで母音 a による行末母音韻が続いている。

4－7. 平賀サタモによる 1959 年の語りにおける詩連と押韻まとめ

以上、4 詩連を中心に、平賀サタモ ([1959]1993) における、2~7 行詩連の行頭母音韻の存在を検証した。アイヌ語は 5 母音言語であり、叙事詩の 2~5 行詩連においては行頭で母音が一致する確率は 8 割以上である。だが、実際には偶然によるよりも高い比率で一致がみられる。これは Philippi ([1979]1982) による「義務的ではないが意識的である」という行頭頭韻にかんする指摘を裏付けるものである。

また、6 行詩連・7 行詩連については、2~4 行からなる複数の部分に分かれると考えられること、それらが押韻の単位となっている可能性があることがわかった。

5. その他の押韻

ここからは、平賀サタモ ([1959]1993) にみられる、行頭行末押韻以外の「押韻と思われる現象」について指摘する。

5 – 1. 複数の詩連において最初の行あるいは最終行を一致させる

例 25

0693	kuwa kurkasi	杖の上に
0694	u kane kuwa	金属製の杖の
0695	cinoye kuwa	捻じれた杖の
0696	kuwa tuykasi	その杖の上に
0697	u notomare.	あごをのせていた。
0698	kuwa kurkasi	杖の上を
0699	u tekurarire.	手で押させていた。
0700	u kurkasike	そのうえで
0701	itak omare.	言葉を発した。

例 26

0637	Easirana	何とまあ
0638	sikari cup noka	満月の模様
0639	u nin cup noka	三日月の模様
0640	earuwato	がたくさんついている
0641	kamuy kosonte	神のコソンテを
0642	u sanasanke.	取り出した。
0643	Cinoye kuwa	捻じれた杖
0644	u kane kuwa	金属製の杖を
0645	u sanasanke	取り出した。
0646	Kamuy cipanup	神のチバヌブ
0647	kamuy ninkari	神の耳輪
0648	kamuy tamasyay	神の首飾り
0649	koaruweun	ひとそろいを
0650	u sanasapte.	取り出した。

例 25 では各詩連の第 1 行に kuwa, kuwa kurkasi が繰り返されている。例 26 では各詩連の最後に sanasanke 「取り出す」という繰り返し語がみられ、その直前に子音 k による行頭韻・繰り返し韻を配置している。これは upopo など伝統歌謡（叙景詩）でもみられる技法である。

5 – 2. 部分的な一致による連鎖

美辞を並べた描写では、行の語句の一部が次の行で用いられる形で連鎖していく。押韻に似るが、完全に同一の単語を用いる点、次には別の単語で連鎖する点が異なる。

5 – 2 – 1. 同一の語句による連鎖

例 27	0637	easirana	何とまあ
	0638	sikari cup noka	満月の模様
	0639	u nin cup noka	三日月の模様
	0640	earuwato	がたくさんついている
	0641	kamuy kosonte	神のコソンテが
	0642	u sanasanke.	出てきた。
	0643	cinoye kuwa	捻じれた杖
	0644	u kane kuwa	金属製の杖が
	0645	u sanasanke	出てきた。
	0646	kamuy cipanup	神のチバヌブ
	0647	kamuy ninkari	神の耳輪
	0648	kamuy tamasyay	神の首飾り
	0649	koaruweun	ひとそろいが
	0650	u sanasapte.	出てきた。

これらは意味的な観点から対句的表現だとも指摘されてきた。確かに sikari cup noka 「満月の模様」と (u) nin cup noka 「三日月（欠ける月）の模様」における sikari cup 「満月」と nin cup 「三日月（欠ける月）」は対句であるが、後半部の noka 「模様」（あるいは前半部の cup も含めて）は同一語句の繰り返しである⁴⁹。

⁴⁹ こういった表現が「くり返し」的性質であると強調したのは立石久雄（1991：164）で

5－2－2. 同一音・類似音による連鎖

語句単位ではなく、同一音や類似音が連続することもある。次の6行詩連では、第2音節目に母音 u、および子音 p による連続性がある。

例 28	0623	Tapan kamuy maw	神の風が
	0624	ketusi upsor wa	ケトウシの中から
	0625	hopuni kamuy maw	吹き出す神の風
	0626	kamuy maw sika	その神の風の上に乗り
	0627	kamuy kosonte	神のコソンテが
	0628	u puspa kane	出てきて

次の3行詩連では各行の行末に a-i を軸とした連続性がある。

例 29	0743	ne hi <u>koraci</u>	であるかのように
	0744	u kus <u>wa ani</u>	通ると、そのため
	0745	uhuy <u>wa paye.</u>	みな燃えて行く。

これらは次に述べる「不完全韻」の一部でもある（下線部で示した）。不完全韻は基本的には2行単位であるが、このように3行以上の連鎖をなす場合がある。

ある。ただし立石久雄は意味的な繰り返しとみなしていたようである。ここでは音形としての繰り返しである点に注目したい。

6. 不完全韻

音素あるいは単音節単位の完全な一致ではなく、行と行の間で複数の音の並びが「似ている」例がある。本稿ではこれらを「不完全韻」(imperfect rhyme) と呼ぶ⁵⁰ (丹菊 2018:22)。

不完全韻は基本的に各詩連内部に対応する 2 行で存在するが、3 行以上にまたがることもあり、また詩連をまたぐこともある。行内部の位置もまちまちである。だが、平賀サタモ ([1959]1993) においては、不完全韻を含む詩連は全 310 詩連中 264 詩連 (85.1%)、不完全韻を踏む行は全 1151 行中 714 行 (62.0%) である。これによって叙事詩全体が「音がよく似た語句の連続」となり、流れるような感覚を生むのである。

不完全韻は基本的に

- ① 複数音節で母音や子音が一致する

というものだが、実際には以下のようなさまざまなバリエーションがある。

- ② 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している
- ③ 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例
- ④ 音節数が異なる例
- ⑤ 行内位置が異なる例
- ⑥ 行内位置と音節数がともに異なる例
- ⑦ 行内位置は同じだがあまり類似していない例
- ⑧ あまり類似しないが 3 行以上にまたがる例

以下では平賀サタモ ([1959]1993) における不完全韻のバリエーションを例示する。

⁵⁰ Imperfect rhyme は英詩などにおいては「完全に韻脚 (foot) が一致するわけではない押韻」を指すが、アイヌ語韻文では韻脚が明確ではない。本稿では「複数の音素が全て一致するわけではない」という意味で Imperfect rhyme という用語を用いている。Kawahara (2007) が指摘する日本のラップ歌謡の Half rhyme に近い現象かもしれない。

6 – 1. 複数音節で母音や子音が一致する

行頭母音韻のように单一の母音だけが一致するのではなく、複数音節で母音や子音が一致する例がある。一致する音の間には別の母音や子音が挟まれている。

例 30	0146 iresu <u>sap</u> o 私を育ててくれた姉上
	0147 tapan te <u>pak</u> n o 今の今まで

例 31	0131 u <u>kane</u> a mset
	0132 u a mset <u>ka</u> wa

例 32	1082 <u>a</u> nak ki <u>korka</u> けれども
	1083 hu <u>nakke</u> kusu せっかく

なお例 32 では母音 i と e、母音 o と u も類似母音であるが、これについては次の第 6 – 2 節で述べる。

特に次のように、前後に同一語句がある場合はより広い範囲で一致した印象がもたらされる。

例 33	0578 <u>kamuy</u> he tapan 神なのだろうか
	0579 <u>aynu</u> he tapan 人間なのだろうか

he tapan という同一語句の繰り返しを後半に持ち、前半部は対義表現（「人」と「神」）だが、同時に不完全韻になつてもいる。このような「よくできた対句」は偶然であろうと意図的であろうと、結果的に広く用いられるであろう。

6 – 2. 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している例

次の例では a-u-a-ke に対し a-u-o-ke が対応している。

例 34

0114	<u>kamuy ranke</u> tam	神が下した刀を
0115	<u>akutpoke</u> ciw	帯の下に差した

ka	muy	ran	ke
a	kut	po	ke
母音 a	母音 u		子音 k・母音 e

次の例では kuni に対し konci が対応している。母音 u と o は同じではないが、狭めの後舌円唇母音という素性が共通する「似ている母音」である。このようにしばしば、一部の素性のみが一致する母音同士が対応している。

例 35

0378	akore kuni	お贈りようと
0379	cikarkar konci	刺繡した帽子を

ku	ni
kon	ci
子音 k・母音 u と o (狭めの円唇母音)	母音 i

なお、この 2 行はもっと広くほぼ行全体に近い kore kuni と karkar konci が不完全韻をしているのかもしれない。

6 – 3. 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例

以下の例では、s は音節単位では同じ位置に来ていない。だが歌の持続時間内部において、音の開始位置は同じ位置に来る。このような場合は一致している印象は強くなるであろう。

例 36	0093 u kesto an kor	毎日毎日
	0094 i resu sapo	私の育ての姉は

歌う際のタイミング

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	ke	sto	an	kor
	休止	i	re	su	sa	po

不完全韻

u	kes	to	an	kor
i	res	u	sa	po
母音 u と i の類似（狭母音） (ただし u は虚辞)	母音 e 子音 s	母音 o と u の類似 (後舌・狭め母音)	母音 a	母音 o

6 - 4. 音節数が異なる例

以下の例では u-a-a-e に対し o-a-a-a-e が対応している。つまり、母音 a による 2 音節と母音 a による 1 音節が対応している（虚辞 u も考慮するならそれも音節数が合わない）。

例 37	0255 u uar tak ne 霞の塊に
	0256 koyaykar kane. なつていて

歌う際のタイミング

レズニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	u	rar	tak	ne
	休止	ko	yay	kar	ka	ne

不完全韻

u, u	ra	r	tak	ne
ko	yayka	r	ka	ne
後舌・狭め母音 u, o (ただし u の 1 つは虚辞)	母音 a	子音 r	母音 a	子音 n・母音 e

6 – 5. 行内位置が異なる例

以下の例では対応する場所に来ていない。0221 行の ram は虚辞を入れて 3 音節目、0222 行の kan は 2 音節目であり、最後の kor の位置もずれている。だが、それでも「似ている」印象を与えるであろう。

例 38

0221	u sen <u>ram</u> se <u>kor</u>
0222	mak <u>an</u> kat <u>kor</u> pe

歌う際のタイミング

レブニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	sen	ram	se	kor
	休止	ma	kan	kat	kor	pe

不完全韻

sen	ram	se	kor
ma	kan	kat	kor
※	母音 a・音節末子音が鼻音	※	CVC 全て一致

上記「※」部分は共通性はないが、ともに前の行で母音 e、後の行で母音 a になっていて、わずかながらも繰り返しの印象をもたらすであろう。

例 39	0433 cipi <u>yepkore</u>
	0434 u <u>yupke</u> hike

歌う際のタイミング

レブニ (拍子棒)	●				●	
	休止	ci	pi	yep	ko	re
	休止	u	yup	ke	hi	ke

不完全韻

yep	ko
yup	ke
子音 y・狭母音・子音 p	子音 k・半狭母音

あるいは cipiyejkore という行全体と yupke hike という行全体同士が不完全韻をなしている、とみるべきかもしれない。

6 – 6. 行内位置と音節数がともに異なる例

以下の例では「似ている」箇所の開始部分も音節数も異なる。

例 40

0197	ae kisarsutu	私の耳元にはそれで
0198	komawkururu	風を切る音が鳴っていた。

レプニ (拍子棒)	●				●		
	休止	ae	ki	sar	su	tu	
	休止	ko	maw	ku	ru	ru	

不完全韻

ki	sar	su	tu
ko	maw	kuru	ru
子音 k	母音 a	母音 u	母音 u

6 – 7. 行内位置は同じだがあまり類似していない例

以下の 2 行は虚辞を含めれば 2 組の母音と 1 組の類似母音が同じタイミングの位置に来ている。このような場合は音の類似度は低くとも「似ている」印象を与えるであろう。

例 41	0279	<u>u</u> petso ka ta
	0280	<u>ho</u> ra o ciwp a

レブニ (拍子棒)	●				●		
	休止	u	pet	so	ka		ta
	休止	ho	ra	o	ciw		pa

不完全韻

u	pet	so	ka	ta
ho	ra	o	ciw	pa
母音 u と o (狭め母音) (ただし u は虚辞)	なし	母音 o	なし	母音 a

6-8. あまり類似しないが3行以上にまたがる例

完全に一致する場合から、素性の一部が似ている場合までこれらの類似度はさまざまである。行のどこに位置するかによっても印象は異なる。ときにはそれら「似ている音」が数行にわたり連続している。これは「5-2-2. 類似音の連鎖」と同じものである。

例 42

0317	u Tan tepo ta	すぐ目の前に
0318	re tar kosonte	白いコソンテの
0319	kam uy menoko	神の女性の
0320	u teksama ta	すぐそばに
0321	mak an kat kor pe	どんな姿のものだろうか
0322	cisi kurure	近寄ってきた。

不完全韻

①②tan	①te	po	①②ta
①②tar	②③ko	son	①③te
③muy	①me	o	(ko)
①tek	④sa	(ma)	①②ta
②④kan	②④kat	kor	③pe
③④ku	③ru	ru	③re
①子音 t	①母音 e	母音 o, u	①子音 t
②母音 a	②子音 k		②母音 a
③母音 u	③母音 o, u		③母音 e
④子音 k	④母音 a		

これらはどこまでが意識的に用いられているのかわからないが、少なくとも一部は意識的なものであろう。以下の例などは偶然かもしれないが、弱くても類似はしており、つまり弱いなりに効果があるであろう。

例 43	1148	yaynuan hike	私は考えて
	1149	iruska kewtum	怒りの心を
	1150	ayaykorpare	私は持つて

不完全韻

yay	nu	an	hike
i	rus	ka	ke
yay	kor	pa	re
yay と i (音節全体の類似)	母音 u と o 子音 n と r (歯茎音)	母音 a	母音 i-e と母音 e

yay, i はともに 1 音節であり、yay は広母音 a を含むが i で始まり i でおわる音節である。yaynuanhī, iruskake の 2 音節目の u に yaykorpare の o が対応する位置にあり、ともに後舌円唇母音である。最終母音は i, e, e で、いずれも狭めの前舌非円唇母音である。yaynuanhī と iruskake の n と r も対応する位置にあるが、ともに歯茎音である。

例 44	1096	u aminumpe	炉縁に
	1097	aurekoyupu	足を押しつけていた。
	1098	cise kan kotor	建物の天井を
	1099	akonottarara	睨みつけていた。

不完全韻

1096	a	mi	-	①num	①pe
1097	au	re	-	①②koyu	①②pu
1098	-	se	kan	①②ko	②tor
1099	-	-	a	①②ko	②not
	母音 a	母音 e, i	母音 a	①母音 o, u ②子音 k	①子音 p ②母音 o, u

1096-1098 はほぼ行全体近くが対応しているが、1099 は行前半部のみが対応している。ただし、1099 後半部に a-a という並びがあることも、1097-1099 の母音 o, u の並びと「同じ（あるいは類似の）母音が並ぶ」という意味で「似ている」印象をもたらしているのかもしれない。

7. 第2章の結論

平賀サタモ ([1959]1993) 1作品だけではあるが、1編全体にわたる「押韻」の全体像がつかめた。アイヌ韻文は4行を単位とする傾向が強い「4行詩連構造」ともいべき構造を有している（4行詩連が最多で全体の33.4%を占める）、6・7行にわたる詩連は実際には5行詩連あるいはさらに行数の少ない複数の詩連から構成されている。

4行詩連においては偶然でも88.6%で行頭母音韻が生じるが、実際の押韻出現数は94.2%であり、意図的に押韻が増やされていると思われる。2行詩連・3行詩連においてもやはり偶然より高い比率で押韻が生じている。5行詩連は判断が難しいが、4行で一致する押韻の出現率が高いことに注意したい。6行詩連・7行詩連については、基本的に内部の構成単位ごとに押韻している可能性が高い。

不完全韻が多いことも叙事詩文体の特徴である。平賀サタモ ([1959]1993) における「不完全韻」の出現率は全310詩連中264詩連（85.1%）である。

第3章 結論

第1章では4行形式を基本とするアイヌ伝統歌謡ウポポについては行頭母音韻が偶然とは思えない高い比率で出現していることがわかった。第2章ではアイヌ叙事詩も4行形式を基本とし、またウポポより出現比率が小さいものの、行頭母音韻が偶然以上に出現していることがわかった。また、どちらにも不完全韻が見られる。つまり、ウポポも叙事詩もよく似た形式を持っている。これは「アイヌ韻文」の形式、文体的特徴とみてよい。

従来「アイヌ韻文」の文体的特徴については、5音節を基本とした音数律、特殊な語彙、定型表現、2行対句などが指摘されてきた⁵¹。本稿ではさらに詩連構造、行頭母音韻、不完全韻の3つを追加したことになる。

また、ウポポと叙事詩の間には押韻の傾向の違いも存在する。村崎恭子による「樺太アイヌの散文説話中に登場する挿入歌に押韻がある」という指摘は叙事詩よりウポポによく当てはまる。叙事詩においては、行頭母音韻の出現率が最も高い4行詩連においても、偶然による確率88.6%に対し94.2%でやや高い比率を示すが、ウポポにおける行頭母音韻の出現率は98.1%とさらに高いのである。叙事詩についてはPhilippiの「意識的だが義務的ではない」という記述のほうが当てはまる。「できるだけたくさん押韻する」と言い換えても良いだろう。ほかにも違いはある。関係文的な繰り返し語句や不完全韻はウポポより叙事詩に多く見られる。

単純に行頭母音韻と同じように数を比較すると、行頭子音韻、行末母音韻はさほど出現率が高くななく、意図的と判断する数的な根拠はない。だが、Philippiも指摘するように散発的ながらも意図的に思える行頭子音韻は存在する。また、行末の繰り返し語句は行末韻の存在を示唆する。

⁵¹ 近年では甲地利恵（2000）奥田統己（2012）など語アクセントと朗唱時の音の高低パターンに関する研究がある。

引用文献

NHK（日本放送協会）編

1965『アイヌ伝統音楽』（ソノシート付）日本放送出版協会

大喜多紀明

2012「『アイヌ神謡集に掲載されたカムイユカラについての考察 修辞論的 視点より』『人間生活文化研究 22』大妻女子大学人間生活文化研究所

奥田統己

2012「アイヌ語の韻文における音節数志向とアクセント志向」『千葉大学ユーラシア言語文化論集 14』千葉大学ユーラシア言語文化論講座

金田一京助

[1908]1992「アイヌの文学」『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』三省堂
7-44、初出『中央公論』23-1・2・3 所収

[1931]1993「ユーカラ概説」『金田一京助全集 第8巻 アイヌ文学 II』三省堂 7-
336、初出『アイヌ叙事詩ユーカラの研究（二分冊）』東洋文庫

[1933]1992「アイヌの歌謡と万葉集の歌」『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』
三省堂 291-313、初出『万葉集講座 第3巻 言語研究偏』春陽堂 所収

久保寺逸彦

1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店

甲地利恵

2000「「クモの神の自叙」の音楽について 旋律構造とリズム配分を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要 6』北海道立アイヌ民族文化研究センター
高倉新一郎（編）

1969『日本庶民生活史料集成 第4巻』三一書房
立石久雄

1991『アイヌの神謡 昔話とユーカラへの道』西田書店
田村すゞ子

1987『アイヌ語音声資料4 福満・鶴川の歌謡』早稲田大学語学教育研究所
1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

田村すゞ子・平賀サタモ
1993『アイヌ語音声資料8 サダモさんのユーカラ2 KOTAN SITCIRE MOSIR
SITCIRE2 村焼き国焼き2』早稲田大学語学教育研究所

丹菊逸治

2018『アイヌ叙事詩鑑賞～押韻法を中心に』北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告
書

中川 裕

1995 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

1997 『アイヌの物語世界』平凡社

中川裕・中本ムツ子

2007 『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』白水社

平賀サタモ

[1959]1993 (田村すゞ子・平賀サタモ 1993 『アイヌ語音声資料 8 サダモさんのユーカラ 2 KOTAN SITCIRE MOSIR SITCIRE 2 村焼き国焼き 2』早稲田大学語学教育研究所 に付属したカセットテープ録音資料)

福田智子・南里一郎・竹田正幸

2002 「古典和歌における反復表現の諸相」『人文科学とコンピュータ』53-7 47-54 情報処理学会研究報告

藤井麻湖

1997 『モンゴル叙事詩のナラトロジー(物語の構造分析)研究 アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として』総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻 博士論文
村崎恭子

1989 『樺太アイヌ語口承資料 1』昭和 63 年度科学研究費補助金(一般研究(C)) 研究成果報告書「樺太アイヌ語の記述的研究」(課題番号 62510266)

村崎恭子・浅井タケ

2001 『樺太アイヌの昔話』草風館

Batchelor, John

1938 An Ainu-English-Japanese Dictionary 4th edition, Iwanami, Tokyo (『アイヌ・英・和辞典 第4版』岩波書店)

Kawahara, Shigeto

2007 Half rhymes in Japanese rap lyrics and knowledge of similarity, J East Asian Linguist, 16, pp113-144

Philippi, Donald L

[1979]1982 Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu, Princeton University Press

付録資料 平賀サタモによる1959年の語りの全詩連構成と全不完全韻

本資料は、音声資料である平賀サタモ ([1959]1993) の詩連構造と不完全韻を示したものである。したがって、平賀サタモ ([1959]1993) の刊行テキストである田村すゞ子・平賀サタモ (1993) とはアイヌ語表記が異なる場合もある。

1. 行番号は田村すゞ子・平賀サタモ (1993) と同一のものを用いた。刊行されたテキストには、語り手の平賀サタモが後日録音を聞いてから追加した行が含まれているが、付録資料には含まれていない。そのため、該当する番号は脱落している。
2. 詩連と詩連の間は1行空けてある。
3. 詩連の最終行が動詞句をなしている場合は■を、名詞句をなしている場合は▲を、接続表現になっている場合は●を付してある。▲には必要に応じてどのような名詞句か、また●には原則としてどのような接続表現が用いられているかを付してある。
4. 不完全韻を含む行のみを文字で示し、それ以外の部分は「○○○」のように省略してある。○は1音節である (CVC音節とCV音節は区別していない)。不完全韻の部分は太字になっている。細字部分は不完全韻に参加していない。
5. 不完全韻は多くの場合詩連内部で押韻するが、詩連をまたいでいることもある。また、不完全韻の複数の組が交錯している場合もあるが、それらの組は区別していない。
6. 虚辞 u、ep は○ではなくそのまま u, ep で示した。
7. 見やすさを考慮して文頭でも大文字にせず全て小文字とした。

0001	iresu casi	0050	u ○○○○
0002	○○○○	0051	iyoykir monpok
0003	cisireanu	0052	cituyeamset
		0053	u ○○○○
0004	iresu sapo	0054	cisireanu
0005	irespa ki wa	0055	u amset kurka
0006	○○○○○	0056	aayoresu
0007	○○○○○		
0008	u pakno ne kor	0057	iresu sapo
0009	u casi kotor	0058	○○○○○
0010	○○○○○	0059	iparosuke
0011	○○○○○	▲ene oka hi	
0012	○○○○○○	0060	easirana
0013	u ○○○○	0061	u pirka suke
0014	○○○○○	0062	eyaykesupka-
		0063	-ewakitara
0015	u emko kusu	0064	u ciwre kane
0016	u ○○○○		●kane
0017	u tonon sukus	0065	u pirka suke
0018	cieomare	0066	ki wa ne ki kor
0019	u semkoraci	0067	kaparpe itanki
0020	u casi upson	0068	○○○○○○
0021	e nipekooma	0069	uw <u>oer</u> oski
		0070	ik <u>oy</u> unpa
0022	u pakno ne kor		
0023	○○○○○	0071	○○○○○
0024	kamuy inuma	0072	ore kesto ta
0025	u rampes kunne	0073	u ki katuhu
0026	cisiturire	0074	○○○○○
0027	iyoykir enka	0075	tane anakne
0028	u nispa mutpe	0076	se mar poronno
0029	otusantuka	0077	u anan ki kor
0030	uokauryu	0078	tap orowano
0031	ukopusakur-	0079	u sirka nuye
0032	u -suya kane	0080	tomika nuye
		0081	tapan pe patek
0033	iyoykir ka ta	0082	nepki ne aki
0034	○○○○○		
0035	kamuy hayokpe	0083	○○○○○
0036	siknu pito ne	0084	○○○○○
0038	u ○○○	0085	makiri etok
		0086	asikrarire
0039	iresu sapo	0087	○○○○○
0040	anikorayap	0088	asikkotesu
0041	kamuy he tapan	0089	○○○○○
0042	aynu he tapan	0090	anioker e
0043	easirana		
0044	u ○○○○	0091	○○○○○
0045	hetuku cup ne	0092	○○○○○
0046	iyenu cupki	0093	u kesto an kor
0047	u ○○○○	0094	iresu sapo
0048	u pirka ruwe	0095	○○○○○
0049	anikorayap	0096	○○○○○
			●ayne

0097	○○○○○			
0098	sineanto ta	0145	○○○○○	
0099	u nisapramta	0146	iresu sapo	
0100	u ○○○○	0147	tapan te pakno	
0101	ekimne rusuy	0148	iresu sapo	▲
0102	iyannukamu			
0103		0149		
0104	ta <p>pan pe kusu</p>	0150		
0105	kamuy hayok pe	0151	○○○○○	
0106	iyoykir ka un	0152	○○○○○○	
0107	auyna katu			
0108	○○○○○	0153	u ○○○○	
0109		0154	○○○○○	
0110	kamuy kosonte	0155	○○○○○	●yak
0111	asikurka sam			
0112	○○○○○	0156	u yuk cikoykip	
0113	uwokkane kut	0157	kasi ciose	
0114	earsay neno	0158	aekarkar ki na	■
0115	ayaykoyupu	0159	itakan tura	●tura
0116		0160	u soy wa samma	
0117	kane pon kasa	0161	anosiraye	■
0118	kasa rantupep	0162	inkaran ruwe	▲ruwe
0119	ayaykoyupu			
0120		0163	○○○○○	
0121	kina tuye hos	0164	○○○○○	
0122	aeyaypokisir			
0123	ekarkar kane	0165	u soyke sama	
0124	●kane	0166	○○○○○	■
0125	○○○○○			
0126		0167	○○○○○	
0127		0168	kamuy kar casi	
0128		0169	keray ne kusu	●kusus
0129		0170	u casi kamuy	
0130		0171	u pirka katu	
0131		0172	○○○○○	■
0132				
0133	u karkar kane	0173	u ○○○○	
0134	●kane	0174	casi soyna wa	
0135	○○○○○	0175	○○○○○	■
0136				
0137		0176	u pirka katu	
0138		0177	○○○○○	■
0139				
0140	u ○○○○	0178	ekimun kiroru	
0141	kane amset	0179	u sinna kane	●kane
0142	u amset ka wa	0180	episun kiroru	
0143	u ranan ki wa	0181	u sinna kane	●kane
0144				
0145	○○○○○	0182	u siran ciki	
0146		0183	ekimun kiroru	
0147		0184	kiroru tuyka	
0148		0185	aeyay rikikur-	
0149		0186	- hopunpa kane	●kane
0150				
0151		0187	u toytoy ka wa	
0152		0188	hopuni rera	
0153		0189	u ○○○○	
0154		0190	○○○○○○	
0155		0191	u ○○○○	
0156				
0157				
0158				
0159				
0160				
0161				
0162				
0163				
0164				
0165				
0166				
0167				
0168				
0169				
0170				
0171				
0172				
0173				
0174				
0175				
0176				
0177				
0178				
0179				
0180				
0181				
0182				
0183				
0184				
0185				
0186				
0187				
0188				
0189				
0190				
0191				
0192				
0193				
0194				
0195				
0196				
0197				
0198				
0199				
0200				
0201				
0202				
0203				
0204				
0205				
0206				
0207				
0208				
0209				
0210				
0211				
0212				
0213				
0214				
0215				
0216				
0217				
0218				
0219				
0220				
0221				
0222				
0223				
0224				
0225				
0226				
0227				
0228				
0229				
0230				
0231				
0232				
0233				
0234				
0235				
0236				
0237				
0238				
0239				
0240				
0241				
0242				
0243				
0244				
0245				
0246				
0247				
0248				
0249				
0250				
0251				
0252				
0253				
0254				
0255				
0256				
0257				
0258				
0259				
0260				
0261				
0262				
0263				
0264				
0265				
0266				
0267				
0268				
0269				
0270				
0271				
0272				
0273				
0274				
0275				
0276				
0277				
0278				
0279				
0280				
0281				
0282				
0283				
0284				
0285				
0286				
0287				
0288				
0289				
0290				
0291				
0292				
0293				
0294				
0295				
0296				
0297				
0298				
0299				
0300				
0301				
0302				
0303				
0304				
0305				
0306				
0307				
0308				
0309				
0310				
0311				
0312				
0313				
0314				
0315				
0316				
0317				
0318				
0319				
0320				
0321				
0322				
0323				
0324				
0325				
0326				
0327				
0328				
0329				
0330				
0331				
0332				
0333				
0334				
0335				
0336				
0337				
0338				
0339				
0340				
0341				
0342				
0343				
0344				
0345				
0346				
0347				
0348				
0349				
0350				
0351				
0352				
0353				
0354				
0355				
0356				
0357				
0358				
0359				
0360				
0361				
0362				
0363				
0364				
0365				
0366				
0367				
0368				
0369				
0370				
0371				
0372				
0373				
0374				
0375				
0376				
0377				
0378				
0379				
0380				
0381				
0382				
0383				
0384				
0385				
0386				
0387				
0388				
0389				
0390				
0391				
0392				
0393				
0394				
0395				
0396				
0397				
0398				
0399				
0400				
0401				
0402				
0403				
0404				
0405				
0406				
0407				
0408				
0409				
0410				
0411				
0412				
0413				
0414				
0415				
0416				
0417				
0418				
0419				
0420				
0421				
0422				
0423				
0424				
0425				
0426				
0427				
0428				
0429				
0430				
0431				
0432				
0433				
0434				
0435				
0436				
0437				
0438				
0439				
0440				
0441				
0442				
0443				
0444				
0445				
0446				
0447				
0448				
0449				
0450				
0451				
0452				
0453				
0454				
0455				
0456				
0457				
0458				
0459				
0460				
0461				
0462				
0463				
0464				
0465				
0466				
0467				
0468				
0469				
0470				
0471				
0472				
0473				
0474				
0475				
0476				
0477				
0478				
0479				
0480				
0481				
0482				

0192	○○○○○		0240	○○○○○	
0193	u ○○○○		0241	u pet turasi	
0194	○○○○○		0242	u arki humi	
0195	u ○○○○		0243	koturimimse	■
0196	○○○○○	●korka	0244	○○○○○	
0197	ae kisarsutu		0245	○○○○○	
0198	komawkururu	■	0246	u kapar typo	
0199	u ○○○○		0247	ayaykakuste	■
0200	○○○○○		0248	u anan awa	
0201	○○○○○	■	0249	u ○○○○	
0202	u ki rok ayne		0250	u ○○○○	●-no
0203	akor ekimne		0251	iteksama ta	
0204	○○○○○○-		0252	u petso ka ta	
0205	-○○○○○	■	0253	○○○○○	
0206	○○○○○		0254	○○○○○	■
0207	ep akor petpo		0255	u urar tak ne	
0208	u pet hontomo		0256	koyaykar kane	●kane
0209	○○○○○		0257	kouratcari	
0210	u ○○○○	●kane	0258	ep ○○○	●wa
0211	u pet teksam ta		0259	anukan ruwe	
0212	acast ustekka	■	0260	ene oka hi	▲ene oka hi
0213	inuan kuni		0261	○○○○○	
0214	ene oka hi	▲ene oka hi	0262	kamuy menoko	
0215	○○○○○		0263	u an nankora	■
0216	○○○○○		0264	○○○○○	
0217	mak an kat kor pe		0265	retar cipanup	
0218	u ek hum konna		0266	u ○○○○	
0219	○○○○○	■	0267	esipine pe	▲名詞句
0220	○○○○○	■	0268	○○○○○	
0221	u sen ram sekor		0269	○○○○○	
0222	mak an kat kor pe		0270	u ○○○○	
0223	u pase humi		0271	u ey pottumma	
0224	e siturare	■	0272	kosinna kane	●kane
0225	u kosne humi		0273	nupur pe sone	■sone
0226	e sihopire	■	0274	nupur can noye p	
0227	u ○○○○		0275	○○○○○	
0228	u ○○○○		0276	u seske kane	●kane
0229	u tuytuy nis ne		0277	u ○○○○○	
0230	ukot tutturse	■	0278	u ○○○○	●kane
0231	u nis rap etok		0279	u petso ka ta	
0232	u numnu kawkaw		0280	horaociwpa	■
0233	u numnu apto		0281	u castustekka	
0234	eran hum konna		0282	u siran awa	●awa
0235	○○○○○	■	0283	ep akor petpo	
0236	iyos nisih		0284	pet kur etoko	
0237	○○○○○		0285	iworso ka wa	
0238	nisoparakur-		0286	○○○○○	▲名詞句
0239	u ○○○○	●kane			

0287	kohumepusi	0337	nupur can noye p	
0288	u ○○○○	0338	esirutumka	
0289	koturimimse	0339	onuya kane	
0290	○○○○○	0340	○○○○○	■
0291	○○○○○	0341	u ○○○○	
0292	inan okay pe	0342	kunne kosonte	
0293	u rapokkari	0343	kamuy menoko	
0294	u ○○○○	0344	○○○○○	▲ene itak hi
0295	u koy samnopo	0345	koninkar kusu	
0296	upak rametok	0346	rep un iwors	
0297	○○○○○	0347	○○○○○	
0298	sipase kamuy	0348	u ek menoko	
0299	u pase humi	0349	kamuy moyre mat	▲名詞句（呼びかけ）
0300	u siturare	0350	iwors ka ta	
0301	u kosne humi	0351	urokte kamuy	
0302	e sihopire	0352	kamuy orusp	
0303	u nis rap etok	0353	apunno siran ya	■
0304	u numnu kawkaw	0354	uvepe kennu	■wepekennu
0305	u numnu apto	0355	u ○○○○	
0306	eran hum konna	0356	retar kosonte	
0307	○○○○○	0357	○○○○○	▲ene itak hi
0308	○○○○○	0358	repusso ka ta	
0309	u ○○○○	0359	○○○○○	
0310	u ○○○○	0360	kamuy or ta anak	
0311	mak an kat kor pe	0361	airanak pe ka	
0312	u ne nankora	0362	isam korkayki	●korkayki
0313	u ○○○○	0363	tanan to or ta	
0314	u san hum konna	0364	Kotan sitcire	
0315	○○○○○	0365	Mosir sitcire	
0316	u ○○○○	0366	San ka tososo	
0317	u tan tepo ta	0367	Oypepi poro	
0318	retar kosonte	0368	○○○○○	▲名詞句
0319	kamuy menoko	0369	u Hon okkasi	
0320	u teksama ta	0370	Opoysuyanke	
0321	mak an kat kor pe	0371	kamuy rametok	
0322	cisi kurure	0372	ne yak easir	
0323	anukan ruwe	0373	○○○○○	
0324	○○○○○	0374	u ○○○○	●wa kusu
0325	kunne kosonte	0375	tanan to or ta	
0326	○○○○○	0376	○○○○○	
0327	koar'uweun	0377	in karan wa kusu	●wa kusu
0328	u yayne nayne	0378	akore kuni	
0329	esipine pe	0379	cikarkar konci	
		0380	akor wa yanan	
		0381	○○○○○○○○	■
0330	○○○○○	0382	itak turano	
0331	u ○○○○	0383	iyon nytasa	
0332	ey pottumma	0384	itak kutcama	
0333	kosinna kane	0385	○○○○○	■
		0386	○○○○○	▲ene oka hi

0387	kim un iworsō		0431	asinuma mosma
0388	iworsō ka wa		0432	mosma an kuni p
0389	u san menoko		0433	cipi yepkore
0390	kamuy moyremat ▲名詞句 (呼びかけ)		0434	u yupke hike
			0435	○○○○○○○○○
0391	kimuy so ka ta		0436	usayne ka tap
0392	ayranak kuni p		0437	u wen menoko
0393	isam he ki ya	■	0438	utar orkehe ▲名詞句
0394	itak rok awa	●awa		
0395	kim un iworsō		0439	○○○○○
0396	○○○○○		0440	○○○○○-
0397	u san menoko		0441	u - yaykata nu
0398	○○○○○	▲ene itak hi	0442	iyekar karkar ha we
			0443	○○○○○
0399	○○○○○		0444	○○○○○
0400	○○○○○		0445	○○○○○
0401	kim un iworsō		0446	ayay korpare ■
0402	epunkine kamuy	▲名詞句	0447	eun ka tapne
0403	○○○○○		0448	u wen menoko
0404	u ○○○○		0449	○○○○○
0405	○○○○○	●taptap	0450	eat tam neno
0406	○○○○○		0451	atupya anki
0407	○○○○○		0452	yaynuan korka
0408	○○ u ○○○	●連体修飾句	0453	apunitara
0409	u hon okkasi		0454	○○○○○○-
0410	oploysyanke		0455	- kokisma kane ●kane
0411	○○○○○		0456	○○○○○
0412	kamuy ne an kur	▲名詞句	0457	irespa siri
0413	ne yak easir		0458	u pirka kuni p ▲名詞句 (p)
0414	ayaykotomka			
0415	yaynuan wa kus	●kus	0459	iresu sapo
0416	tanan to or ta		0460	○○○○○
0417	○○○○○		0461	u ne a hine
0418	in karan wa kusu	●wa kusu	0462	○○○○○
0419	akore kuni		0463	sino utarpa
0420	matan pusi taptap	●taptap	0464	sino rametok ▲名詞句 (呼びかけ)
0421	akor wa sanān		0465	eannu ki pe
0422	ki ruwe tas tapan nek■		0466	eannukar pe
0423	u hawas hike	●hike	0467	iruska kewtum
			0468	eki wa ne kor ●kor
0424	iruska kewtum		0469	sem okkayoram
0425	ayaykorpare	■	0470	○○○○○○
0426	mak an kat kor pe		0471	nep enukar yakka
0427	u ○○○○		0472	nep enu yakka
0428	○○○○○		0473	ikiya eyruska na ■
0429	○○○○○			
0430	u ○○○○	●taptap	0474	sekor okay pe
			0475	○○○○○○
			0476	etoko ta
			0477	○○○○
			0478	○○○○
				▲hi

0479	○○○○○		0526	ane cikuni	
0480	○○○○○		0527	anehaytare	■
0481	koetoranne	■	0528	○○○○○	
0482	○○○○○		0529	ayepekare	■
0483	u oar apunno		0530	○○○○○	
0484	homar rera		0531	○○○○○	■
0485	homaritara	■	0532	u ki rok ayne	
0486	hopuni rera		0533	anukar ruwe	
0487	u ○○○○		0534	ene oka hi	▲ene oka hi
0488	aeyaypastere	■	0535	u nep pahawe	
0489	u sanan katu		0536	ikonu kuni p	●p
0490	○○○○○	■	0537	retar sik numi	
0491	u sanan hike	●hike	0538	○○○○○	■
0492	○○○○○		0539	○○○○○	
0493	tanan to or ta		0540	u sikkeruru	■
0494	○○○○○	▲名詞句 (呼びかけ)	0541	u siktokoko	■
			0542	arus ka kusu	●kusu
0495	u yuk cikoykip		0543	u kanna ruyno	
0496	kasi close		0544	asirkik hum konna	
0497	ae ekarkar ki na	■	0545	○○○○○	
0498	itakan awa	●itakan awa	0546	○○○○○	■
0499	nep ka u asakno		0547	○○○○○	
0500	sirepa <u>an</u> yakun		0548	cikoykip kamuy	
0501	iresu sapo		0549	ranma katuhu	
0502	ikoyki sekor		0550	○○○○○	■
0503	○○○○○	●kusu	0551	ki hi orowa	
0504	tu iwors <u>o</u> ka		0552	u pancikiri	
0505	tu kenass <u>o</u> ka		0553	atapkak kokomo	■
0506	anop <u>asopas</u>	■	0554	aetapka konna	
0507	inkaran hike	●hike	0555	racinitara	■
0508	u simomanpe		0556	ep akor casi	
0509	○○○○○		0557	kopakke sama	
0510	komoynatara	■	0558	ayay tuyere	■
0511	u tuyma uk pe		0559	ayay terke re	■
0512	○○○○○		0560	u ○○○○	
0513	omare kane	●kane	0561	iresu casi	
0514	u hanke uk pe		0562	casi erupsik ta	
0515	kokirawri <u>ki</u>		0563	u tan rikna wa	
0516	u roski kane	●kane	0564	u ○○○○	
0517	ipe sir konna		0565	○○○○○○	
0518	○○○○○	■	0566	○○○○○	■
0519	u sirki hi ta		0567	u pakno ne kor	
0520	oar apunno		0568	harkiso peka	
0521	○○○○○		0569	u casi teksam	
0522	ayaytuypare	■	0570	u ○○○○	
0523	u pancikiri		0571	hapur toy kunne	
0524	u ○○○○○		0572	aureekiru	■
0525	anesikari	■	0573	ahunan hike	
			0574	○○○○○	
			0575	○○○○○	■

0576	neun motokor pe		0623	tapan kamuy maw	
0577	ane wa tapne	■tapne	0624	ketusi upsor wa	
0578	kamuy he tapan	■tapan	0625	hopuni kamuy maw	
0579	aynu he tapan	■tapan	0626	kamuy maw sika	
			0627	kamuy kosonte	
0580	iresu sapo		0628	u ○○○○	●kane
0581	u tan te pakno				
0582	○○○○○		0629	tapan pe rekor	
0583	○○○○○	▲hike	0630	easirana	
0584	○○○○○		0631	kamuy kosonte	
0585	○○○○○	●ayne	0632	iyaynomare	■
0586	usayne ka tap		0633	u sirkka kasi	
0587	u ○○○○		0634	○○○○○	
0588	utar orkehe	▲名詞句	0635	○○○○○	
			0636	ene oka hi	▲ene oka hi
0589	itak ne yakka		0637	easirana	
0590	ciyeko somo-		0638	sikari cup noka	
0591	u -yaykatantu		0639	u ○○○○	
0592	iyekarkar kusu	●kusu	0640	earuwato	
			0641	kamuy ko sonte	
0593	cipi yepkore		0642	u sanasanke	■
0594	cipi yepkore				
0595	u yupke hike		0643	○○○○○	
0596	○○○○○○		0644	u ○○○○	
0597	○○○○○		0645	u ○○○○	■
0598	○○○○○	●hike			
			0646	kamuy cipanup	
0599	○○○○○	▲p	0647	kamuy ninkari	
0600	○○○○○	●kusu	0648	kamuy tamasay	
			0649	koaruveun	
0601	iruska ipor		0650	u sanasp te	■
0602	anan tuyka ta				
0603	ipukitara	■	0651	○○○○○	
			0652	○○○○○	
0604	○○○○○		0653	○○○○○	
0605	○○○○○○	■	0654	○○○○○	■
0606	u casi kotor				
0607	akonottara	■	0655	○○○○○	
			0656	○○○○○	●wa
0608	u ○○○○				
0609	○○○○○		0657	○○○○○	
0610	inukar ayne	●ayne	0658	○○○○○	■
			0659	kamuy ninkari	
0611	oar apun no		0660	kisar uyruke	■
0612	hopun pa hine	●hine			
			0661	kamuy cipanup	
0613	u ○○○○		0662	erurikikur	
0614	○○○○○	■	0663	u ○○○○	●kane
0615	u ○○○○	■			
			0664	u ○○○○	
0616	○○○○○		0665	○○○○○	
0617	○○○○○	■	0666	○○○○○	
			0667	riwak kamuy ne	
0618	ketusi upsor		0668	koyaykar kane	●kane
0619	u tekkusp are	■			
0620	mak an kat kor pe				
0621	u ○○○○				
0622	etoko orce	▲etoko orke			

0669	○○○○○		0718	hayokan ruwe	
0670	○○○○○○		0719	○○○○○	■
0671	u ○○○○				
0672	○○○○○	■	0720	tumu an kewtum	
			0721	○○○○○	
0673	ep akor sapo		0722	somo ne nankor	■
0674	u nan tuykasi				
0675	hetuku cup ne		0723	○○○○○	
0676	iyenucupki		0724	erekor moto	
0677	u ○○○○	●kane	0725	ene oka hi	▲ene oka hi
0678	u casi kotor		0726	○○○○○	
0679	sikari cup no ka		0727	○○○○○	
0680	u ○○○○		0728	○○○○○	
0681	○○○○○	■	0729	○○○○○	■
0682	iyoype nipek		0730	kiyanne hike	
0683	ep ○○○○		0731	kamuy nis ka ka ta	
0684	u ○○○○		0732	a kopuriniwkes	■
0685	kosonte nipeki	▲名詞句			
			0733	u ○○○○	
0686	○○○○○		0734	○○○○○	
0687	○○○○○		0735	○○○○○	■
0688	u ○○○○	▲名詞句			
			0736	u ki pe ne kus	
0689	○○○○○		0737	○○○○○	
0690	○○○○○		0738	ene oka hi	▲ene oka hi
0691	○○○○○				
0692	○○○○○	■	0739	u sinis kotor	
			0740	u ○○○○	
0693	kuwa kurkasi		0741	u ○○○○	
0694	u kane kuwa		0742	e sisuye kor	●kor
0695	cinoye kuwa				
0696	kuwa tuykasi		0743	ne hi koraci	
0697	u ○○○○	■	0744	u kus wa ani	
			0745	u huy wa paye	■
0698	kuwa kurkasi	■			
0699	u tekrarire	■	0746	u ○○○○	
			0747	○○○○○	■
0700	u ○○○○		0748	○○○○○	■
0701	itak omare	■			
			0749	○○○○○	
0702	itak ne manu p		0750	iki yakkayki	●yakkayki
0703	○○○○○				
0705	○○○○○	■	0751	u apkas hum ko	
0706	○○○○○	●ene oka hi	0752	○○○○○	
			0753	○○○○○	■
0707	○○○○○		0754	○○○○○	■
0708	○○○○○				
0709	○○○○○	▲名詞句 (呼びかけ)	0755	u ki wa ne kor	
			0756	mak anan ne kor	
0710	○○○○○		0757	u ○○○○	
0711	○○○○○	■	0758	○○○○○	
			0759	○○○○○	■
0712	○○○○○				
0713	kamuy rametok	▲名詞句 (呼びかけ)	0760	○○○○○	
			0761	mosirkes umma	
0714	apaskuma kus ne kor		0762	u apkas hum ko	
0715	○○○○○		0763	○○○○○	
0716	somo an kuni p		0764	○○○○○	■
0717	○○○○○○	●kus			

0765	u kus wa ani		0811	u ○○○○	
0766	u huy wa paye	■	0812	u ne yak tasi	●tasi
0767	orowa easir		0813	upak pito ne	
0768	otu pa re pa		0814	upak siretok	
0769	neno iki ayne	●ayne	0815	○○○○○	●
0770	iperusuy kor	●kor	0816	u ○○○○	●kusu
0771	ka m u y n i s k a t a		0817	○○○○○	
0772	u un cise ta		0818	○○○○○	■
0773	○○○○○	●kor	0819	u ○○○○	
0774	○○○○○		0820	○○○○○	●eiki
0775	○○○○○	●ayne	0821	u ○○○○	
0776	u hon ne kor pe		0822	○○○○○	
0777	u totta kunne		0823	ene oka hi	▲ene oka hi
0778	○○○○○	■	0824	teeta kane	
0779	u hon okkasi		0825	hoskino kane	
0780	op oysuyanke	■	0826	mosir kar kamuy	
0781	u ○○○○	■	0827	mosir kar ayne	●ayne
0782	ipe rok ayne	●ayne	0828	cikuni kupka	
0783	u hon ne kor pe		0829	ani mosir kar	
0784	u totta kunne		0830	u ki rok kupka	
0785	sisam omare	■	0831	mosir noski wa	
0786	ne hi mosma poka		0832	u ○○○○	●hine
0787	koyay sinire		0833	○○○○○	
0788	ki yak aramu		0834	○○○○○	▲pe
0789	he topo horka	●horka	0835	sipase kamuy	
0790	u ranke mosir		0836	tekek aru kuni p	
0791	oran hum konna		0837	kupka ne kor pe	
0792	○○○○○	■	0838	u ne yakkayki	●yakkayki
0793	○○○○○	■	0839	u toykomunin	
0794	u apkas hi ta		0840	e yaynunuke	■
0795	u ○○○○		0841	tapan pe kusu	
0796	mosir noski ta		0842	pon cikisani ne	
0797	○○○○○		0843	hetuku katu	▲katu
0798	○○○○○	▲	0844	sikenukar pe	
0799	○○○○○		0845	u ne korkayki	●korkayki
0800	u ○○○○		0846	heru yaynu ne	■
0801	○○○○○		0847	anak ki korka	●korka
0802	○○○○○	●kane	0848	sekor an menoko	
0803	○○○○○		0849	sipase kamuy	
0804	u ○○○○		0850	ne yak ta akor	
0805	u ○○○○	■	0851	u yaynu katu	▲katu
0806	enka sike kus kor	●kor	0852	kamuy yaynu kuni	
0807	nukar wa ne kor	●kor	0853	u ○○○○	
0808	○○○○○○		0854	e yaynunuke	■
0809	ene pirka hi		0855	u hon kor ruwe	
0810	○○○○○	●sekor	0856	○○○○○○	
			0857	u kor ruwe ne	■

0858	○○○○○		0907	○○○○○	
0859	u pesamoma		0908	u ○○○○	
0860	○○○○○	■	0909	aporose pe	
0861	ki ru we ne korka	●korka	0910	u moto orke	
0862	○○○○○		0911	○○○○○	■
0863	u ○○○○		0912	○○○○○	
0864	eresu kumi p		0913	○○○○○	
0865	u ewkuskusu	■	0914	○○○○○	
0866	○○○○○		0915	○○○○○○	
0867	○○○○○		0916	ne hi tapan na	■
0868	○○○○○		0917	eani taptap	
0869	○○○○○		0918	○○○○○	
0870	u ○○○○	●hine	0919	ean yakkayki	●yakkayki
0871	○○○○○		0920	○○○○○	
0872	u ○○○○		0921	○○○○○	
0873	u ○○○○		0922	○○○○○	●kusu
0874	○○○○○○		0923	asi numa tap	
0875	○○○○○	■	0924	u ramuanan hi	▲hi
0876	○○○○○○		0925	rep un iwors	
0877	u kor rame tok		0926	atuyso kurka	
0878	○○○○○	■	0927	epunkine kamuy	
0879	u ki wa ne kor	●kor	0928	u kor ture si	▲
0880	u nen ta usa		0929	○○○○○	
0881	u respa ciki		0930	○○○○○	
0882	u pirka kuni	●kuni	0931	○○○○○	●yakun
0883	kamuy o poysan		0932	kim un iwors	
0884	○○○○○		0933	○○○○○	
0885	u ne nankora	■	0934	kamuy menoko	▲
0886	sekor okay pe		0935	pon mat ne ekor	
0887	○○○○○		0936	ki wa ne yakne	●yakne
0888	ewkoramkur-		0937	○○○○○	
0889	u ○○○○	●kane	0938	○○○○○	
0890	○○○○○	●hike	0939	u ne pa ki wa	
0891	○○○○○		0940	uwaste yakun	●yakun
0892	○○○○○	■	0941	tapan pe sonno	
0893	tapan pe kusu	●kusu	0942	mosir erekor	■
0894	u yaytekawa		0943	○○○○○	
0895	u kanto oro wa		0944	u ○○○○	
0896	○○○○○		0945	○○○○○	■
0897	u ranan ruwe	▲ruwe	0946	○○○○○	
+			0947	○○○○○○	■
0898	ep ○○○○		0948	○○○○○	■
0899	○○○○○				
0900	○○○○○	■			
0901	aeres pa pok a				
0902	eyaykoramu-				
0903	-○○○○○	●ayne	0949	orowau n suy	
0904	○○○○○		0950	○○○○○○	
0905	○○○○○		0951	si pase kamuy	
0906	○○○○○○	●kus	0952	ane wa ora	●ora

0953	tapan te pakno		1001	○○○○○
0954	aeyaykoresu		1002	○○○○○○
0955	u ki rok ayne	●ayne	1003	kamuy nis ka un
0956	○○○○○		1004	u yaytunaska
0957	amonkurkasi		1005	ep aki ki na
0958	kosumnatara	■	1006	aye a itak
0959	ki wa ne yakun		1007	u pirkanopo
0960	tapan te pakno		1008	○○○○○
0961	○○○○○		1009	○○○○○
0962	○○○○○	●kusu	1010	arespa kamuy
0963	nisatta wano		1011	tane anak ne
0964	tapan te wano		1012	○○○○○
0965	kamuy mosir ka un		1013	rikinan kus ne
0966	u kanto or un		1014	itak turano
0967	u ○○○○		1015	iresu sapo
0968	○○○○○	■	1016	○○○○
0969	u ○○○○		1017	eosiraye
0970	ep ○○○○		1018	u ○○○○○
0971	○○○○○○	■	1019	u yay tuypare
0972	eani anak		1020	○○○○○
0973	○○○○○		1021	○○○○○
0974	kamuy ne an kur	▲	1022	○○○○○
0975	u ○○○○		1023	○○○○○
0976	kamuy inuma		1024	○○○○○
0977	koeun ki wa	●wa	1025	○○○○○
0978	eehayok pe		1026	○○○○○
0979	○○○○○		1027	ne hi koraci
0980	ki pe ne wa kusu	●kusu	1028	ru an toy ka wa
0981	opitta aeckore		1029	tapan kamuy maw
0982	○○○○○	■	1030	cirikipuni
0983	u ○○○○		1031	ne hi koraci
0984	u ○○○○		1032	iresu sapo
0985	○○○○○		1033	○○○○○
0986	u ki nankon na	■	1034	○○○○○-
			1035	-○○○○○
0987	u pirkanopo		1036	u arkuwanno
0988	eyay kewtum ka		1037	kamuy nis kotor
0989	ehunara	■	1038	koy yaytunaska
0990	○○○○○		1039	u ○○○○
0991	○○○○○		1040	○○○○○
0992	○○○○○	■	1041	u sapoe huyean (?)
0993	kamuy moyremat		1042	aray kotenke
0994	utar orkehe		1043	ikian awa
0995	u arki ciki		1044	tan poro paraparak
0996	iteki koyki na	■	1045	aesaraninp
0997	○○○○○			
0998	eren ecine	■		
0999	tapan a casi			
1000	○○○○○○○	■		

1046	u ki rok awa	●awa	1096	u aminumpe
1047	iresu sapo		1097	aurekoyupu
1048	○○○○○		1098	cise kan kotor
1049	ene oka hi	▲ene oka hi	1099	akonottarara
1050	okkayo pirka			
1051	nep eciskar hawe an	■	1100	u anan awa
			1101	u senram sekor
1052	○○○○○			●sekor
1053	○○○○○		1102	kamuy moyre mat
1054	○○○○○		1103	utar orkehe
1055	kamuy hekaci			▲
1056	ene a hine	●hine	1104	○○○○○
			1105	kunne kosonte
1057	u ○○○○		1106	tu menoko ne wa
1058	u ○○○○			●wa
1059	ene a hine	●hine	1107	poro ketusi
1060	nep eciskar hawe	■	1108	u sut ketusi
			1109	○○○○○
1061	○○○○○		1110	○○○○○
1062	u aynu mosir			■
1063	○○○○○○		1111	iruska kew tum
1064	aye ye rok awa	●awa	1112	ayaykorpare
1065	okkayo pirka		1113	anak ki korka
1066	nep ciskar pe tap		1114	hunakke kusu
1067	kohawkor hawe		1115	○○○○○
1068	oka ya sekor	●oka ya sekor	1116	iresu sapo
			1117	iye a itak
1069	iresu sapo			▲
1070	○○○○○		1118	sekor eyki yak ne
1071	○○○○○		1119	mosir erekor
1072	esirotatpa	■	1120	eki katuhu
			1121	u ○○○○
1073	u nei ta pakno		1122	sekor erekor
1074	u sinis kotor		1123	u ○○○○
1075	eyay rikikur-			■
1076	u nunpa korka	●korka	1124	itak rok awa
			1125	yaynuan kusu
1077	○○○○○			●kusu
1078	u ○○○○		1126	tan hus kotoy wa
1079	○○○○○		1127	cise kan kotor
1080	○○○○○		1128	akonottesusu
1081	○○○○○	■	1129	anan korka
				●korka
1082	anak ki korca		1130	u kanna ruyno
1083	hunakke kusu		1131	u kane amset
1084	○○○○○		1132	cituye amset
1085	○○○○○		1133	u amset kurka
1086	cikaspaootte			akoyayo sura
1087	iyekarkar pe	▲pe	1134	
			1135	u tanto tori
1088	u nei ta pakno		1136	u yaykotuy ma
1089	u cisan yakun	●yakun	1137	asi ramsuye
1090	semok kayoram			
1091	○○○○○○		1138	mak an kat kor pe
1092	yaynuan kusu	●kusu	1139	sipase kamuy
			1140	sinis kor kamuy
1093	iresu casi		1141	orya ciki
1094	u casi or un		1142	poho ane wa
1095	a hunan hine	●hine		●ciki
				●wa

- 1143 tapan **te wano**
1144 mosir **erekor**
1145 u **aynu sekor**
1146 ○○○○○○○
1147 u ○○○○
1148 **yaynuan hike** ●hike
- 1149 **iruska kewtum**
1150 **ayaykor**pare
1151 u **anan katu**
1152 ○○○○○ ■
- 1153 ○○ ■pakno (結句)

丹菊 逸治（たんぎく いつじ）

アイヌ・先住民研究センター准教授。

専門は口承文芸論、アイヌ語アイヌ文学、ニヴフ語ニヴフ文学。

Alliteration in Ainu Poetry

Ainu and Indigenous Language Archive Project Report 2019

Published on March 25, 2020

Written by TANGIKU Itsuji

Published by Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

Kita 8-jo Nishi 6-chome, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0808, Japan

Printed and bound by Hakuyo Printing

2019 年度アイヌ・先住民族言語アーカイヴ・プロジェクト報告書

アイヌ韻文の行頭韻

2020 年 3 月 25 日 発行

2020 年 7 月 22 日 第二刷

著者 丹菊逸治

発行 〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

印刷・製本 柏楊印刷株式会社
